「松菊里型竪穴住居」の受容と展開

－日韓の比較から－

伊藤秀紀・永井宏幸・蔭山誠一

はじめに

縄文時代から弥生時代への展開は、日本の文化・歴史における大きな画期と考えられ、これまで農耕や金属器の利用、近代的思想といった文化が大陸から伝播し、日本の各地に受容されたことが多くの研究により明らかにされてきた。この大きな変革を考える１つの資料として縄文時代から弥生時代への変化に伴って形態の変わる竪穴住居も注目され、様々な交流の一端を究明する上で貴重な資料となっている。特に「松菊里型住居」といわれる住居は日本・韓国における近年の調査により資料が増加し、新たな検討が可能となってきた。今回は弥生時代中期前葉の尾張地域の弥生遺跡にもみられる「松菊里型住居」がどのような系譜をもち変遷をしていくのか、主に韓国における無文土器時代中期、日本における弥生時代前期～同中期前葉の住居資料から考えてみる。

１．研究史

（１）中間の研究（中間1987）

中間研志は日本において北部九州地域を中心に発見されている弥生時代前期から中期前半の中央土坑と双ピットをもつ平面円形プランの竪穴住居の分析を行い、夜臼式新～板付Ⅱ式古段階の古期松菊里型住居、弥生時代前期末～中期前半期の新期松菊里型住居・発展期松菊里型住居の３タイプに分類した。ただし古期と新期の違いは時期差に基づくものであり、発展期松菊里型住居は双ピットが相対的に浅く小さく、多角形配置の主柱配置をもつ大型の住居であることが特徴とされた。そして当初双ピットの存在や中央土坑内に残る砥石・作業台石・石皿などから石器製作や脱穀作業に伴う臼機能を持つ土坑とその後中央土坑が炉機能をもつようになり、双ピットの機能も住居の上屋を支える杵的支柱から単純に上屋を支える棟持柱へと変化することを想定した。北部九州地域における平面プランの異なる竪穴住居については機能差を想定されている。現在の状況からすると概ね指摘通りと思われるが、古期と新期松菊里型住居の分類、発展期松菊里型住居の細分類、双ピット間の距離に対する認識など再検討の余地を残す部分がある。また当時の資料状況からか韓国における事例についてあまり言及されておらず（日本例を松菊里型住居としている）、韓国事例と日本における事例との比較が十分に行われていない。そのために特に西日本地域に伝播したと考えられる松菊里型住居の位置付けについて現在不十分な点があるように思われる。

（２）日本の研究

日本においていわゆる「松菊里型竪穴住居」の研究は、1987年に中間研志による「松菊里型竪穴住居」の提唱以前、弥生時代における竪穴住居の地域性についての石野博信の研究に始まる（石野1985）。石野は西日本地域の弥生時代中期に主流を占める平面円形プランの竪穴住居に注目して筑後の北牟田型住居（平面円形プランで中央土坑と双ピットを中央土坑外に伴い、さらに多角形配置の主柱配置をもつ）と備後の神辺型住居（平面円形プランで中央土坑と双ピットを中央土坑外に伴う、無主柱配置のもの）の２つの地域型を設定した。北牟田型住居は弥生時代前期末に筑後地域で成立し、弥生時代後期の定岡型住居（平面長方形プランで中央土坑・地床炉とその外に主柱化し二本配置に変化した双ピットを伴う）に変化するとした。神辺型住居は備後において弥生時代中期前半に成立し、弥生時代後期前半まで存続することを示した。そして北牟田型住居の分布から北部九

州地域から近畿地域への住居型の人の移動に伴う伝播を想定した。またこの２つの住居型の北牟田型住居は後に「松菊里型」住居に改称している（石野1986）。資料の増えた現在においてはこの２つの住居型は遅くとも弥生時代前期後半段階の近畿地域西部には伝わっているようであり、これら地域型の分析は検討の余地はあるものの日本における竪穴住居の地域性を考える上で重要な視点といえる。

住居の平面プランを重視する石野に対して、都出比呂志は住居内部に残る炉と主柱配置に着目して、３つの地域型を設定した（都出1989）。弥生時代前期末には東海地域西部までの西日本地域に成立する灰穴炉と同心円構造タイプと東日本地域に伝統的に存在する地床炉と対称構造タイプ、弥生時代中期の北部九州地域において成立する地床炉と二本主柱構造タイプである。東日本地域の対称構造タイプは古墳時代前期において西日本地域からの影響を受けて平面正方形化し、さらに古墳時代中期に竈の伝播により対称構造タイプは完全に変質を遂げるとされる。西日本地域の同心円構造は古墳時代中期の竈の伝播まで存続すると指摘されている。現在この３つの地域型は弥生時代前期から中期前半において形成され、弥生時代を通じて存在する竪穴住居の大様式であるという解釈が妥当のように思われる。しかし都出の研究では当時ある程度の想定はされていると思われるが、今回の検討の対象である西日本地域の灰穴炉と同心円構造タイプの成立過程については十分に論じられていない。

宮本長二郎は九州地域の弥生時代住居を統計的に分析し、平面プランの円形プランのものと方形プランのものが併存する時期があること、中央土坑と炉の存在率について指摘されている（宮本1985）。

また報告書においても福岡県小郡市の一ノ口遺跡など弥生時代前期後半から中期前半の竪穴住居について分析が行われており（速水1994など）、平面円形プランの住居と方（長方）形プランの竪穴住居の存在形態について注目されており、現在においてもこの指摘は当時の社会状況を考える上では重要な問題といえる。

同様な点は下條信行により九州地域の弥生時代集落を検討する中で、弥生時代前期から中期の竪穴住居平面プランなどについて分析が行われている（下條1975）。

石川悦雄は宮崎県の竪穴住居について、弥生時代前期から古墳時代後期に至る竪穴住居の変遷を分析している（石川1991）。

高橋信武は縄文時代晩期の主に九州地域の竪穴住居を集成・分析し、縄文時代晩期末の北部九州地域における竪穴住居が平面方（長方）形プラン主体であり、縄文時代晩期の黒川式期の松丸Ｄ遺跡住居において松菊里型住居が存在することを指摘している（高橋1998）。

最近西谷正によって韓国と日本における松菊里型住居についての研究に対して検討が行われており、住居だけではなく墓制を含めた総体的な視点の重要性を指摘している（西谷1998）。その際に都出から日本における松菊里型住居の問題点（西日本地域における弥生時代中期の住居との関係、中央土坑と双ピットの機能）が指摘されている（都出1998）。　（蔭山）

（３）韓国の研究

松菊里型住居が最初に発見されたのは1968年にはじまった休岩里遺跡の調査であった。10基ほどの方形・円形プランの住居址で楕円形の土坑と双ピットが見つかり、また方形・円形の重複関係から方形が先行することが確認された。ただし、報告書の刊行（国立中央博1990）が遅れたこととそのほかに特に目立つものがなかったことであまり関心を引くことがなかった。

1975年からおこなわれた松菊里遺跡の調査ではこれと対照的に様々な遺構・遺物が注目を集めることとなった。炭化米・籾痕土器・石刀（石包丁）などから水稲耕作がおこなわれたこと、扇形銅斧の鋳型から青銅器が製作されたこと、土坑墓などの墳墓の土器と住居の土器の共通性から両者が同時期であることなど個々の事象では無文土器時代の文化として既に想定されていたことが総体的に把握できるようになった。さらに松菊里型土器などの新たな要素も見いだされた。これらの諸特徴を持った文化を松菊里遺跡の報告書（国立中央博1979ほか）などでは松菊里文化と呼んでいるが、いわゆる松菊里型住居もその構成要素の１つとして関心を引くことになった。

80年代の発掘の進展に伴い韓国南部地域の大也里・大谷里・検丹里などの遺跡で多くの住居址が発掘され、その中で様々なタイプの松菊里型住居が検出された。これら諸遺跡の発掘報告書が刊行されて（林ほか1988など）、松菊里型住居に対する資料が蓄積されるとともに1987年には日本で中間研志が日本の松菊里型住居を分類・検討する論文を発表した（中間1987）。これを受け韓国でも1992年には松菊里型住居に関する２本の論文が提出された。李健茂の「松菊里型住居分類試論」（李1992）と安在晧の「松菊里類型の検討」（安1992）である。

李健茂は松菊里文化の１要素である松菊里型住居がどのように形成され拡散し日本へ伝播していったかを考察した。李はまず松菊里型住居を楕円形の中央土坑と双ピットの位置によって双ピットが中央土坑の内にあるもの（以下Ａ型とする）、外にあるもの（同じくＢ型）、双ピットがないもの（同じくＣ型）に分類しそれぞれのタイプの分布相をみた。韓国ではＡ型は中西部・南西部に、Ｂ型は南東部に、そしてＣ型は南西部に分布するとした。また、日本では中間の古期・新期・発展の３分類の中に彼のどのタイプが存在するかを検討した。その結果中間の古期・新期はB型だけであり、発展松菊里型住居は全てのタイプが出現するとした。以上の住居タイプの分布相と遺物から次のような松菊里型住居の発展・伝播経路を想定した。休岩里遺跡でまず長方形プランのＡ型が現れ南下・拡散する中Ｂ型とＣ型が出現した。日本にはＢ型が分布する地域から伝播した。

安在晧は既述の松菊里文化を李清圭の意見を入れ松菊里類型と呼びその松菊里類型がどのように成立しどのような地域色を持つかを検討しさらに松菊里型住居にみられる円形プランの意味を論じた。安はまず石刀（石庖丁）の分布相をもとに松菊里類型の展開する地域を西南・東南端・東南内陸地域に、時期を石器と土器で松菊里類型に変化する時の違いをもとに先松菊里類型段階・松菊里類型段階に分けた。以下住居に関する地域ごとの変遷を論文からまとめると、西南地域では先松菊里類型段階で休岩里遺跡に方形のＡ型松菊里型住居が現れ松菊里類型段階にはいると円形の松菊里型住居が出現し後半には松菊里型住居ではない方形の住居に移行する。東南端地域では先松菊里類型段階に検丹里遺跡でＢ型の住居が現れるが松菊里類型段階の遺跡は確認されていない。東南内陸地域は先松菊里類型段階の後半から松菊里類型段階の早い時期に西南・東南端両地域の影響を受けて大也里遺跡・大谷里遺跡で円形のＡ型・Ｂ型の松菊里型住居が現れ松菊里類型段階の後半には松菊里型住居ではない方形住居に移る。以上から円形の松菊里型住居が松菊里類型段階の前半だけに現れる一時的な住居形態と規定した。また、中央土坑を中間の意見を入れて作業孔としこの時期に住居内から炉が消失して屋外炉が現れることとともも絡めてその背景を次のように考えた。水稲耕作がおこなわれると共同作業が重視されそのため

に作業孔を中央に持ってくる住居形態をとったり集団で炊事をおこなうことで集団構成員の結束を高めた。このような社会への移行期には不安定要素が重なり争いなどが起こりやすくそれを避けるために住居の移動が頻繁になり簡易な円形の住居が選ばれたのである。

その後、李弘鍾は『青銅器時代の土器と住居』で後期無文土器時代に登場する土器文化を在来系と外来系に分け、それぞれの土器文化が持つ住居形態とともにその変遷を論じた（李1997）。李は松菊里式土器文化を在来系としたが、ここでいう在来系とはその出自に関わりなく既存の土器文化と交流してそれを変容させつつ自身も変化していくタイプのものをいう。松菊里式土器文化の各遺跡で現れる様々な土器相と住居形態は結局この文化をどのように受け入れ変容させたかの違いとしてとらえられるとしそれを次のようにまとめた。中部地域に入った純粋松菊里式土器文化は円形プランのA型であった。これが既存の方形プランの住居と結合し休岩里遺跡のような方形プランのA型を作り出した。また、本来の松菊里型住居は土坑と双ピットの周囲に4柱穴を持つタイプに移行していく。寛倉里遺跡ではさらにこれと結合してプランだけが方形になったものが生まれるが中部地域全体は最終的には円形プランの文化に組み込まれていく。東南地域では大也里のようにB型に変容させて受け入れた。西南地域では住岩ダム（大谷里）のように様々な住居タイプが現れ松菊里式土器も受け入れるが中心は既存の方形プランの住居のままであった。

また、申相孝は「松菊里型住居の復元的考察」で報告書のデータを整理しながら松菊里型住居の細部を検討しその復元モデルを提示した（申1996）。中央土坑の周辺に対する詳細な記述のない松菊里遺跡・休岩里遺跡を除けばその半数近くが碾石・台石などが検出されそのほかの住居址でも未完成石器・石材片・砥石などの出土が多くみられることから松菊里型住居は石器製作所の可能性が高いとし同時期の松菊里型でない方形住居が基本的には居住・貯蔵空間となるというその使い分けを想定した。松菊里型住居のタイプ別の面積はA型・C型・B型の順に大きくなり、A型・C型は周囲に4柱穴を持つものがより大きいとして松菊里型住居の発展を次のように考えた。まず休岩里遺跡や松菊里遺跡でA型が生まれやがてその周囲に4柱穴を持つタイプに発展していく。一方A型が拡散していく中で、大也里遺跡ではB型に発展させて受容し、大谷里遺跡ではC型に発展させたのである。なお、申は松菊里型住居の復元として円錐形の簡易なものでなく下は円形であるが上部は切妻形のものの可能性を指摘している。

なお、申鉉東は「朝鮮・日本古代住居址考」で慶尚南道にある新石器時代の鳳渓里遺跡第7号住居址を松菊里型住居の祖型として提示した（申1993）。申はさらに新石器時代の南京遺跡31号と岩寺洞遺跡6号にみられる中央坑や青銅器時代（無文土器時代）の石灘里遺跡5号・9号の楕円形土坑をあげて松菊里型住居を含めこれらの住居址の先後継承関係や構造の変遷を研究することの必要性を述べた。

韓国での松菊里型住居の研究は住居址だけでなく様々な要素を加味した総合的な研究が主流で資料数がそれほどないにも関わらず一定の成果を上げているが、細部における研究、土器の編年などは十分確立していない状況である。そのために日本との詳細な比較検討はさらなる資料の増加を待つ必要がある。（伊藤）

２．伊勢湾地域の事例

伊勢湾周辺では、愛知県下に２遺跡、三重県下に６遺跡ある。ここでは、縄文時代晩期から弥生時代中期中葉の竪穴住居を概観するなかで松菊里型住居を取り上げる。

縄文時代晩期後半

愛知県豊川市麻生田大橋遺跡に１例、三重県嬉野町蛇亀橋遺跡に２例ある。いずれも遺跡の主体は土器棺墓群が中心となる墓域である。

麻生田大橋遺跡は、五貫森式の平地式住居。プランは円形、4.8×4.5ｍで、主柱穴は８本、地床炉が中心からややずれる偏在型。

蛇亀橋遺跡は楕円形プランと隅丸方形プランがある。前者は７本？の主柱穴が壁際にめぐり、地床炉や中央土坑は確認されていない。時期は、前者が馬見塚式、後者が不明。

弥生時代前期

愛知県に２遺跡、三重県に３遺跡ある。

愛知県の例は名古屋市西志賀遺跡が隅丸方形、一宮市山中遺跡が方形プランの竪穴住居である。特に山中遺跡は環濠内の住居群で、遠賀川系土器を主体とする遺跡として注目されている。残念ながら松菊里型住居の確認はないが、可能性はある。

三重県の例はすべて円形プランで、そのうち松菊里型住居は２例ある。

大谷遺跡Ｃ地区４号住は地床炉と中央土坑が併存する事例。中央土坑の双ピットは主柱穴と考えられる。

金剛坂遺跡の例は多角形配置の柱穴をもち、中央土坑が楕円形、双ピットが外離タイプとなる。双ピットを持たない中央土坑の例は、大谷遺跡Ｂ地区１号住と鐘突遺跡６号住がある。

弥生時代中期初頭

ここではのちに取り上げる朝日遺跡・志賀公園遺跡を除いて事例をあげる。

三重県では、中央土坑に双ピットを有する事例が１例ある。平田遺跡１号住は、平面形態が円形、多角形配置の柱穴、楕円形浅土坑、双ピットが外離タイプ。

弥生時代中期中葉

三重県で２遺跡ある。

辻垣戸遺跡Ｅ地区ＳＢ12は、中央土坑と地床炉が併存する例。平面形態が円形、方形配置の柱穴、楕円形中土坑、双ピットが外離タイプ。地床炉は主柱穴間にある。

東庄内Ｂ遺跡ＳＢ177とＳＢ55とは平面形態が円形、方形配置の柱穴、円形中土坑、双ピットが外離タイプ。

東庄内Ｂ遺跡では、松菊里型住居以外に平面形態が円形、方形配置の柱穴で中央に地床炉をもつ住居が２例ある。

東日本の事例

長野県上伊那郡中川村原田遺跡では、平面形態は方形、プランの外回りに柱穴が巡るものが３例ある。中央土坑と双ピットは円形中土坑、外離ピットが２例。円形中土坑が偏在、ピットは双ピットにならないものが１例ある。時期はおそらく中期前半と考えられる。原田遺跡は、方形プランではあるものの、列島内における東端の類例であろう。

志賀公園遺跡の事例

志賀公園遺跡は西志賀遺跡に隣接する遺跡で、同一集落の可能性がある。弥生時代の遺構は中期初頭から中葉の居住域と中期初頭から末の墓域が確認されている。

竪穴住居は円形と方形があり、それぞれ地区をかえて存在する。円形住居は２例あり、そのうち１例が松菊里型住居（ＳＢ12）である。

ＳＢ12は5.5ｍの円形プランで方形配置の柱穴を持つ。柱穴には柱痕と礎板が遺存している。中央土坑は0.95×0.52×0.16ｍの楕円形浅土坑。双

ピットの位置は外接タイプ。また、住居内から炭化材や壁材と思われる粘土塊が多く、焼失住居と考えられる。出土遺物は中期前葉の条痕紋系土器、下呂石の打製石鏃、剥片、転礫の原石、黒曜石などがある。

朝日遺跡の事例

朝日遺跡の中期前葉と考えられる竪穴住居は、これまでに100棟近く確認されている。住居の切合いが複雑なため、全容は不明なものが多い。比較的把握しやすい、円か方の基準で平面形を見ていくと、円が27例、方が59例の内訳となる。したがって、円よりも方が卓越することが読み取れる。

ところで、松菊里型住居は北集落に1例、南集落に3例ある。これら4例の共通点は他の住居と切合うことがなく確認されていることだ。複雑に切合う居住域の中にあって、松菊里型住居は特異な空間に位置する。

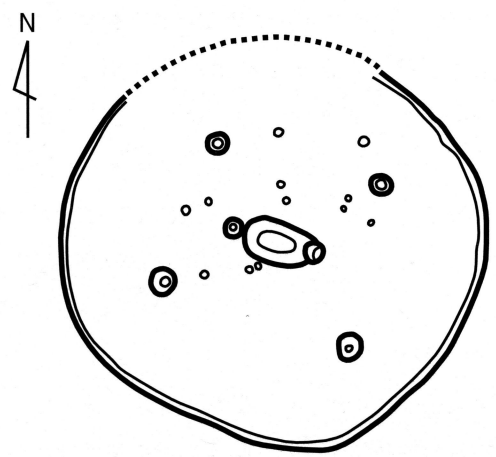
中央土坑と双ピットの関係から見てみると、楕円中土坑＋外接タイプが2例、楕円深土坑＋外離タイプが2例となる。

伊勢湾周辺のまとめ

伊勢湾周辺の縄文時代晩期の住居形態は円形である。弥生時代前期、特に中期以降になると方形あるいは長方形のプランが卓越してくる。その中で松菊里型住居は円形プラン、多角形配置を基本とする特徴的な住居である。ただし、志賀公園遺跡例は方形配置の柱穴である点は注目できる。

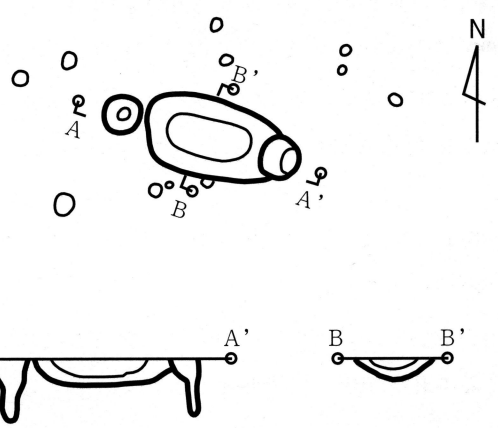
松菊里型住居の特徴である中央土坑と双ピットから見てゆくと、次のようなことが指摘できる。

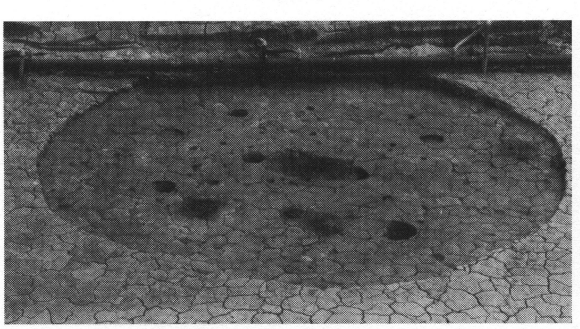
中央土坑の形態は、楕円形のみで、中土坑が一般的である。双ピットの位置は内側のものはなく、外接か外離タイプのいずれかとなる。集落内での松菊里型住居の位置づけは、朝日遺跡や志賀公園遺跡を例に取れば、他の住居と切合うことなく、特異な空間として考えられる。　（永井）



住居跡平面図（1：100）

中央土坑平面および断面図（1：50）



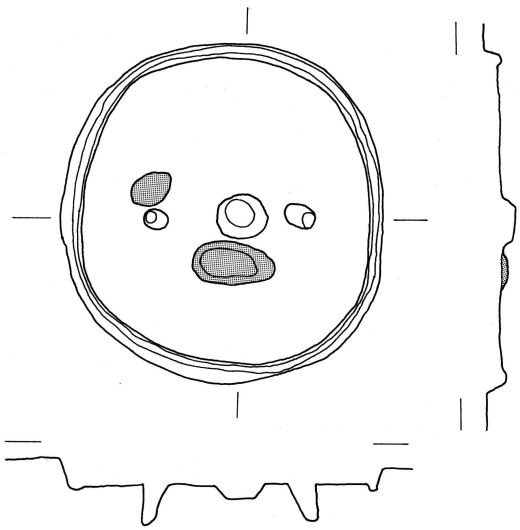


全景写真

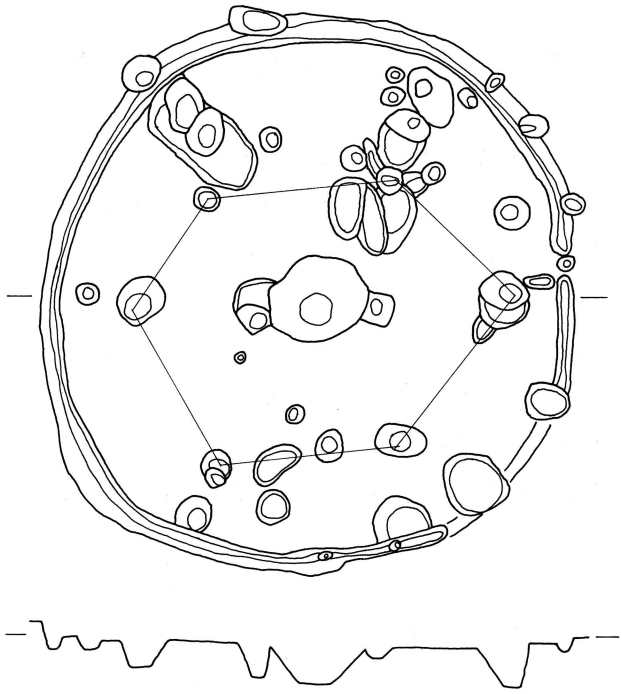
中央土坑

柱穴断面

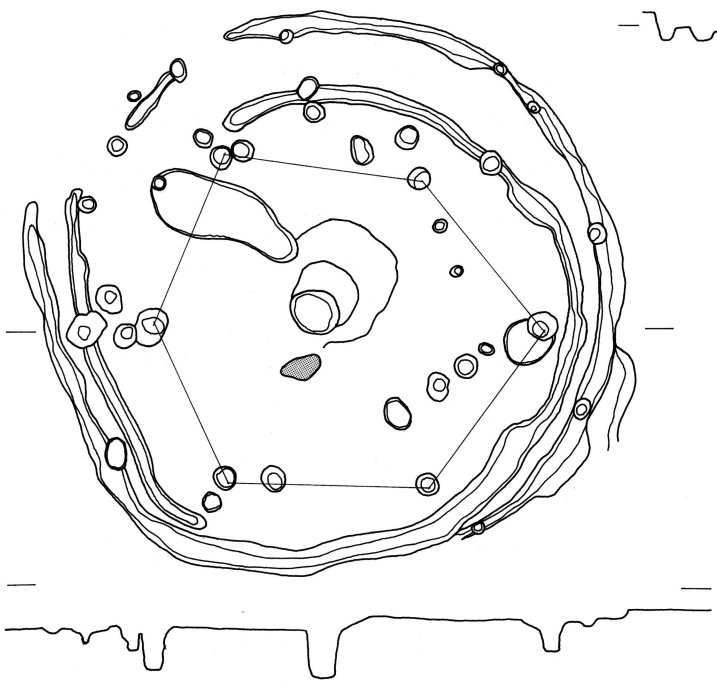
第1図　志賀公園遺跡の松菊里住居



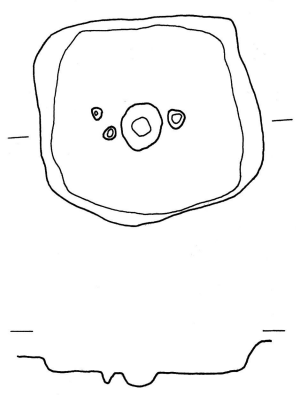
大谷遺跡C地区4号住居



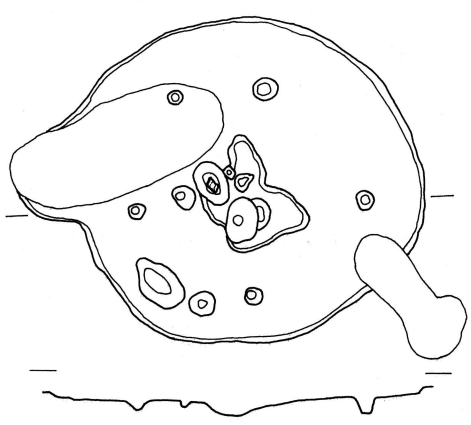
朝日遺跡　SB45



大谷遺跡B地区1号住居



原田遺跡3号住居



平田遺跡01号住居

第２図　東海地域の松菊里住居（１：100）

3．縄文晩期から弥生中期前葉の竪穴住居の変遷

（1）竪穴住居の形態分類

竪穴住居の形態について、竪穴掘り方平面、主柱穴配置、中央土坑・炉の形態、双ピットの位置、中央土坑・炉の位置の5つの要素について分類し、韓国から西日本地域における竪穴住居の変遷を明らかにする。先に述べた東海地域の竪穴住居については以下に述べた分類に基づく。

竪穴掘り方平面の分類

竪穴住居掘り方の平面形を円形型・楕円形型・方形型・長方形型の大きく4形式に分類し、さらに方形型と長方形型をそれぞれ3つに細分する。

円形型…平面円形のもの。多角形状のものを含む。

楕円形型…平面円形で長径が短径の1．2倍以上のもの。

方形型…四角形平面のもので、正方形状のもの。隅部分の形状により3つに分ける。

方形型…隅部分が直角であるもの。

隅丸方形型…隅部分が丸くあるもの。

胴張り方形型…2辺が竪穴外側に弧状になるもの。

長方形型…四角形平面で、長軸が短軸の1．2倍以上の長方形状のもの。隅部分の形状により3つに分ける。

長方形型…隅部分が直角であるもの。

隅丸長方形型…隅部分が丸くあるもの。

胴張り長方形型…2辺が竪穴外側に弧状になるもの。

主柱穴配置の分類

竪穴床面にみられる柱穴で主に上屋を支えたと思われる柱穴の並びを2本配置・方形配置・長方形配置・多角形配置の4つと無主柱に分ける。

2本配置…屋根を支えたと思われる柱穴が2個のみで、2つの柱穴身心間の長さが2m以上あるもの。

方形配置…4本以上の屋根を支えたと思われる柱穴が方形に配置されるもの。屋根の棟を支えたと思われる柱穴をさらにもつものもある。

三角形配置…屋根を支えたと思われる柱穴が三角形に配置されるもの。

長方形配置…4本以上の柱穴が長方形に配置されるもので、長方形の長辺の長さが短辺の長さの1．2倍以上になるもの。屋根を支えたと思われる柱穴をさらにもつものもある。

多角形配置…5本以上の屋根を支えたと思われる柱穴が円周状に配置されるもの。

無主柱…屋根を支えたと思われる柱穴が不明瞭なもの、明確な柱配置が認められないもの。

中央土坑の分類と炉の形態

竪穴床面中央付近に存在する円形・楕円形状土坑を「中央土坑」と呼ぶ。中央土坑を平面形態と土坑の深さから6つに分類した。炉は焼土面をもつものを地床炉として扱い、いわゆる「灰穴炉」は中央土坑に含めた。

方・円形浅土坑…平面方形・円形のもので、床面からの深さが20cm以内のもの。

方・円形中土坑…床面からの深さが20cmより深く40cm以内のもの。

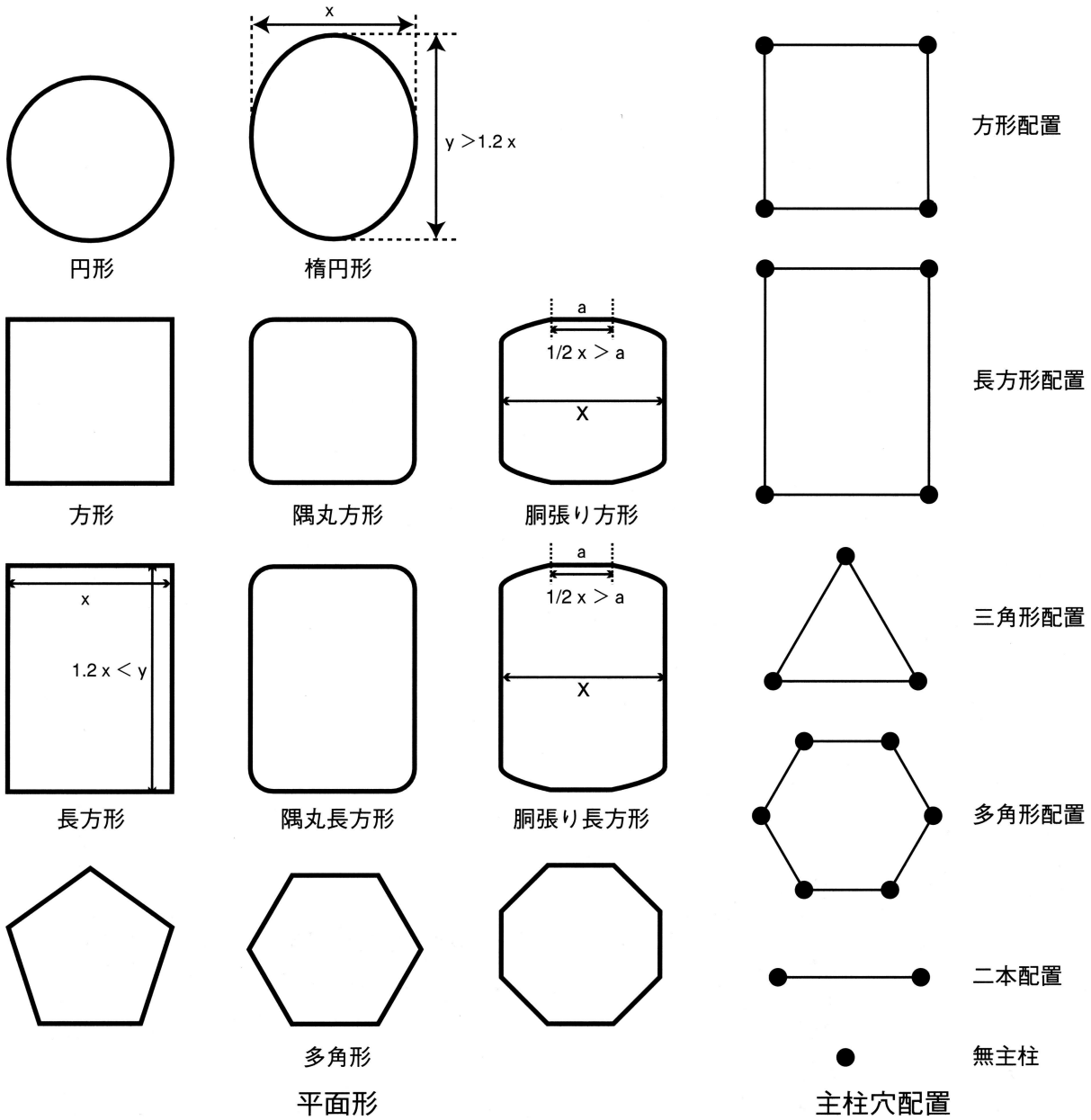
方・円形深土坑…床面からの深さが40cmより深いもの。

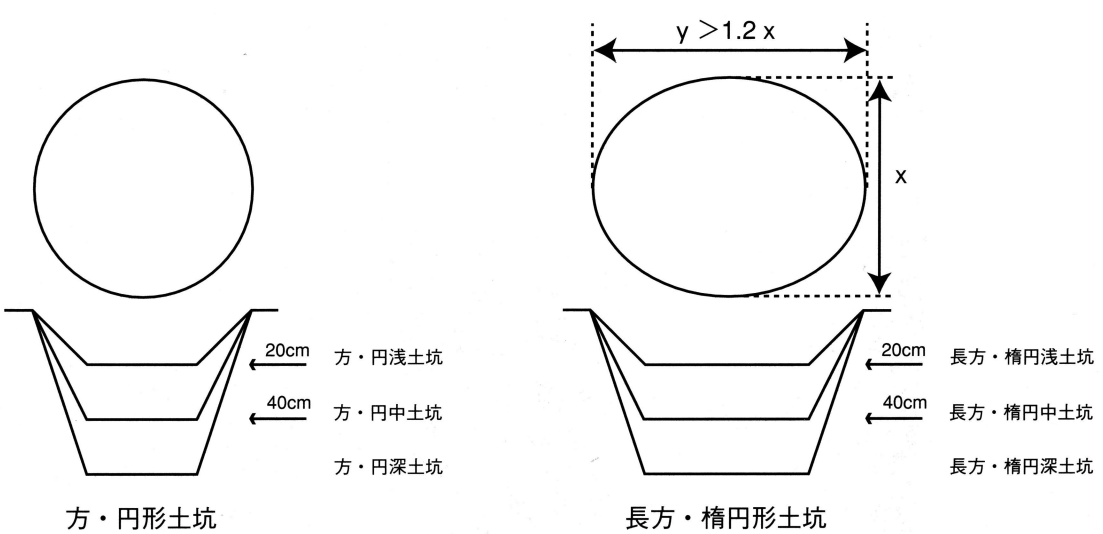
長方・楕円形浅土坑…平面長方形・楕円形のもので、床面からの深さが20cm以内のもの。

長方・楕円形中土坑…床面からの深さが20cmより深く40cm以内のもの。

長方・楕円形深土坑…床面からの深さが40cmより深いもの。

地床炉…床面に焼土面が認められるもの。石囲炉等その他の炉形態のものも一括してこの中に含む。





第３図　竪穴住居の分類（１）

中央土坑・炉の位置の分類

中央土坑・炉と竪穴平面・主柱配置の位置関係を３つに分類した。

中央型…中央土坑・炉が住居の中央に位置するもの、対角にある主柱穴、竪穴掘り形平面の隅を結んだ交点にあるもの。

偏在型…中央土坑・炉が住居中央よりややずれるが、主柱穴を結ぶ梁や桁の下に中央土坑・炉の一部がかからないもの。無主柱の住居では、竪穴周壁より中央に近く位置するもの。

主柱穴間型…炉が主柱穴を結ぶ梁や桁の下に炉の一部がかかるもの、それより竪穴周壁寄りに位置するもの。無主柱の住居では、中央より竪穴周壁に近く位置するもの。

双ピットの位置の分類

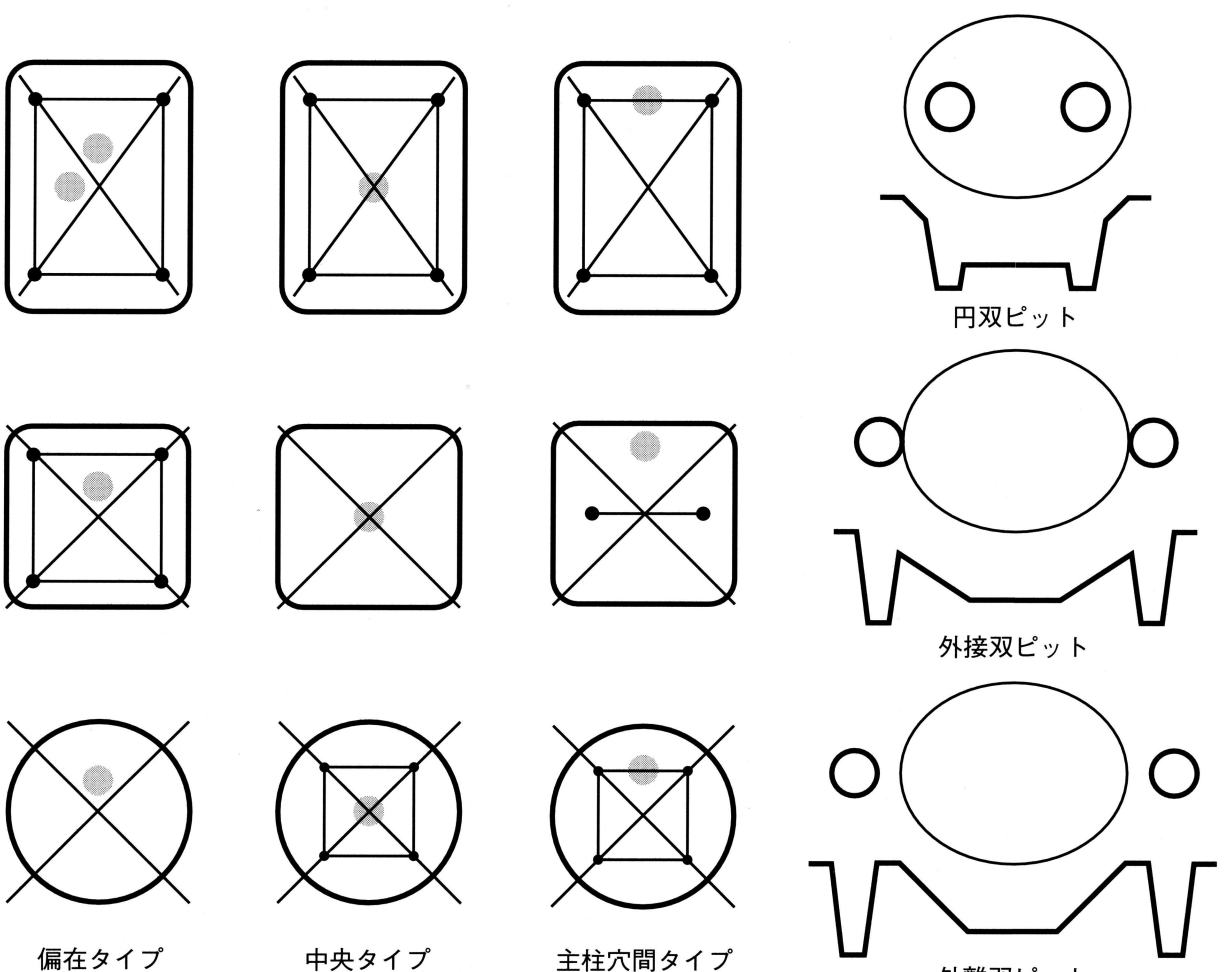
中央土坑の内部・両脇に隣接して掘られた２個１組の柱穴を「双ピット」と呼ぶ。双ピットと中央土坑の位置関係から３つと双ピットが不明瞭なものに分類する。

内双ピット…中央土坑の内部に双ピットがあるもの。

外接双ピット…中央土坑の外側に隣接して双ピットがあるもの。１つ以上のピットが隣接しているもの。

外離双ピット…中央土坑の外側に離れて双ピットがあるもの。主柱配置二本配置と同類である。

双ピット無し…双ピットが２つ揃って存在していないもの、中央土坑のみのもの。　（蔭山）



第４図　竪穴住居の分類（２）

（2）韓国の事例

韓国の場合、平面形態は松菊里型住居に限れば円形系統が主体で方形系統はそれほど多くない。そのなかで休岩里遺跡と大谷里遺跡は方形系統の松菊里型住居が高い比率でみられる遺跡である。大也里遺跡でも方形系統の住居址が目立ち検丹里遺跡は方形系統だけであるが、大部分地床炉を持つものである。なお、地床炉を持つ円形系統の住居址は1基もみられない。

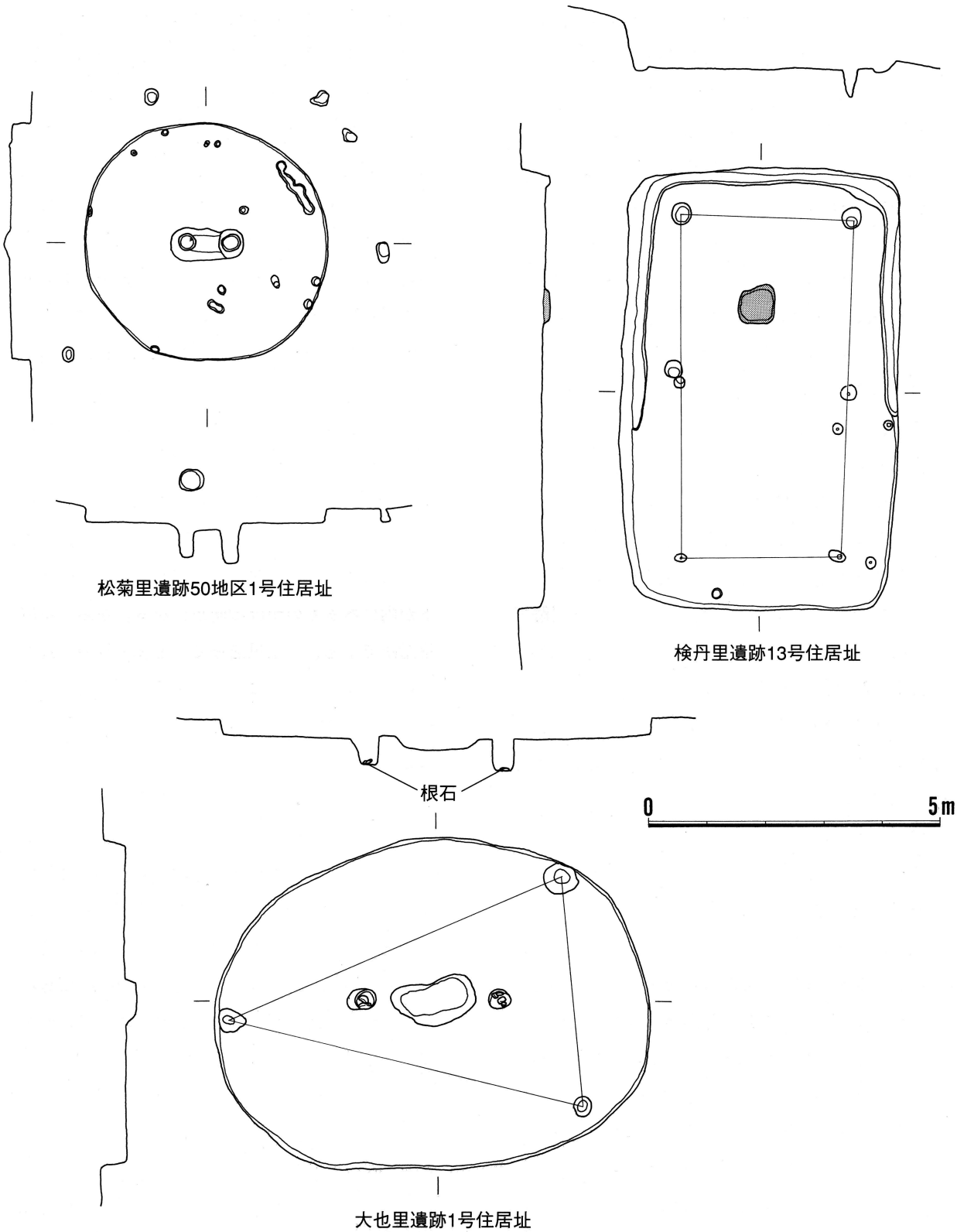
柱配置は松菊里型住居では無主柱のものがほとんどであるが中央土坑の周囲に方形または長方形に4本の柱を配置したものが多くの遺跡でみられる。方形系統の住居址では検丹里だけが方形・長方形配置が多くみられるがその他の遺跡では無主柱が中心になっている。主柱ではないが小ピットが壁際をめぐるものが休岩里遺跡・松菊里遺跡・長川里遺跡・松岩洞遺跡・大也里遺跡の円形系統の住居址を中心にみられた。また、大也里遺跡では住居址の外郭にピットをめぐらすものが円形・方形系統ともに数基みられた。

中央土坑の形態はほとんどが楕円形・隅丸長方形などの細長いタイプのもので休岩里遺跡のものも正円ではない。また、土坑の深さは20cm以下の浅いものがほとんどであるが、長川里遺跡と大谷里遺跡では20㎝～40㎝のものが20㎝以下のものより多くなっている。また、中央土坑が炉址として使われたと思われるような被熱・焼土などの記述はどの遺跡の報告でもみられなかった。ただし、富松洞遺跡2号と松菊里遺跡55-1号の中央土坑では灰・木炭が検出され灰穴炉に使われた可能性は否定できない。なお、中央土坑を作業坑とみるものが多いが、住居址内で碾石・台石などが検出されたり砥石・未完成石器・石材片が中央土坑内で出土する例は比較的よく見られる。しかし、中央土坑を作業坑として使用したと思われる記述は中央土坑内から碾石（片）あるいは人頭大の石が出土したという大谷里遺跡住居の3例のみである。

双ピットの位置は富松洞遺跡・休岩里遺跡・松菊里遺跡・松岩洞遺跡はすべて中央土坑の内にあり、壬仏里遺跡は接するか外にあるものである。検丹里遺跡の双ピットなしはすべて地床炉である。ただし、この中には地床炉の横に1つだけピットがあるものもある。また、ここで接するとした3基の内楕円形の土坑を持つものは1基だけであり残りは地床炉の横に双ピットがあるものである。検丹里遺跡のこれらのピットは楕円形土坑の横にあるものも含めいずれも10cm前後の浅いものである[1)]。長川里遺跡は双ピットがないものもあるがほとんどが中央土坑の内にあるタイプである。大也里遺跡・大谷里遺跡では全タイプが検出されているが、松菊里型住居に限れば大也里遺跡は双ピットが接するか外にあるものが主流になり、大谷里遺跡では双ピットがないものと双ピットが内にあるものがほぼ同数になる。なお、長川里遺跡で1基、大也里遺跡では1基を除いた残りの住居址すべての双ピットの底に礎石が置かれ双ピットが柱穴として利用されていたことが想定される。

土坑・炉の位置は中央にあるものがほとんどで、大谷里と検丹里に見られる偏在は地床炉である。したがって、楕円形の土坑は中央に位置し地床炉は基本的に中央からやや偏して作られている。（伊藤）

1）安在晧はこのような地床炉とその横にあるピットから松菊里型住居の楕円形土坑と双ピットに変容していったと考えた（安：1995）。



第５図　韓国における松菊里・非松菊里住居（１：100）

番号	遺跡名	平面形									柱配置					中央土坑							位置			双ピット			
		円形	楕円形	多角形	胴張方形	隅丸方形	方形	胴張長方形	隅丸長方形	長方形	多角形配置	方形配置	長方形配置	三角形配置	二本配置	無支柱・不明	長方・楕円形浅	長方・楕円形中	長方・楕円形深	方・円形浅	方・円形中	方・円形深	地床炉・他	中央土坑なし	中央	偏在	壁際・主柱穴間	内	外接	外離	双ピットなし
1	休岩里（円）	2										2					2								2			2			
	休岩里（方）				1	1	1	2	1	1						7	6			1					7			7			
2	松菊里（円）	9	1										1			9	9	1							10			10			
	松菊里（方）							1	1	4						6								6							
3	富松洞	2										1				1	2								2			2			
4	大也里（円）	7	4											1		10	7	2		1				1	9	1		2	3	4	1
	大也里（方）				1	1	1	2	1	1		1	1		1	4	1						3	3	2	2		1			
5	壬仏里	2																							2			1	1		
6	松岩洞	1															1								1			1			
7	長川里	4	2													6	1	4						1	5			4			1
8	大谷里（円）	11										3	2			6	4	6	1						11			2	1	1	7
	大谷里（方）				8	9	7	5	9	8			2		1	43	5	3					5	33	11	2		4	1		5
9	検丹里				2		13	1	2	35		12	35	3		3	1						39	13	2	38			3		37

第１表　韓国の竪穴住居一覧表

（３）　九州地域の事例

縄文時代晩期・弥生時代早期の資料としては福岡県石崎曲り田遺跡、同江辻遺跡などでみられ、石崎曲り田遺跡では平面隅丸方形に方形配置の主柱配置と無主柱のものがあり、江辻遺跡では松菊里型住居といわれる平面円形に中央土坑と外離双ピットをもつものがみられる。石崎曲り田遺跡住居は縄文時代晩期の北九州地域で普遍的に見られるもので、江辻遺跡住居は弥生時代前期に主体となる平面円形で中央土坑と外離双ピットをもつタイプの先駆けとなるものである。

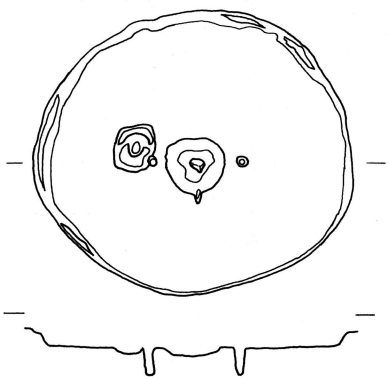
弥生時代前期前半は不明瞭であるが前期後半以後は資料が増加し、一定の傾向が分かる。

平面形態では、前期後半以後中期前半まで平面円形のものが主体で、多角形配置の主柱配置と無主柱のものが多く見られる。平面方形の住居は福岡県野黒坂遺跡、同下稗田遺跡、同一ノ口遺跡Ⅰ地点で弥生時代前期後半の平面円形のものにともなって同時に見られるようであり、以後中期前半までその傾向は続く。これらの主柱配置は方形配置のものも少し見られるが、無主柱の小規模なものが多い。長崎県四反田遺跡の弥生時代前期における住居では、平面円形は同様であるが、主柱配置において方形配置が多角形配置より主体であるようであり、中期初頭の佐賀県一本松遺跡住居においても平面円形住居に方形配置のものが多角形配置のものとほぼ同数ある。二本配置のものはほとんどない。

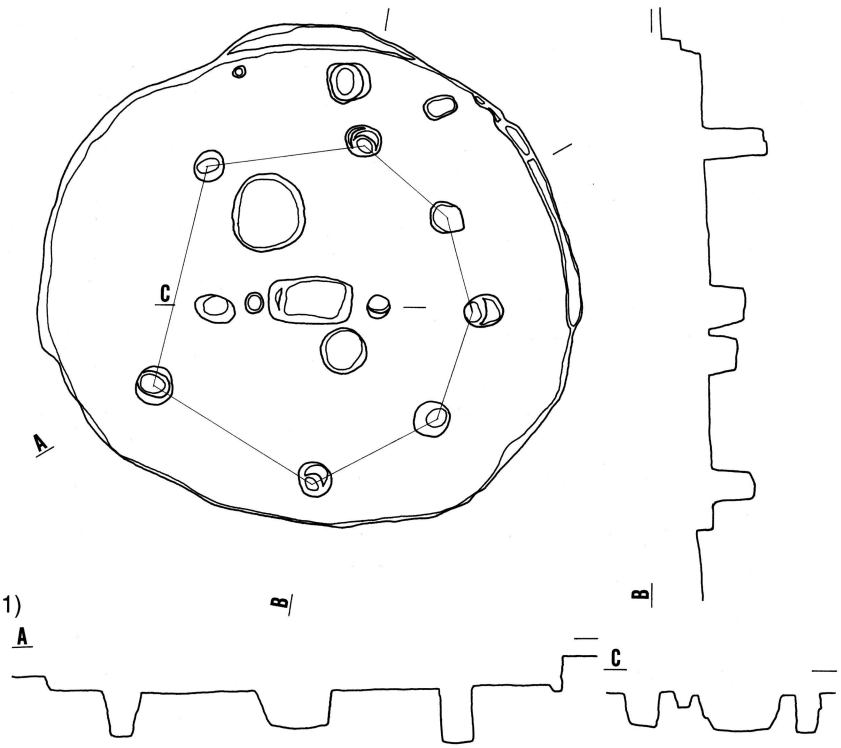
中央土坑の形態では、弥生時代前期後半以後、全体的には長方形・楕円形中土坑～深土坑のものが主体であるが、方形・円形中土坑～深土坑の中央土坑も一定量ある。福岡県一ノ口遺跡Ⅰ地点では長方形・楕円形深土坑が主体であるが、同下稗田遺跡では方形・円形中土坑が主体であり、遺跡によりやや傾向が異なる。また平面形態において特徴があると述べた四反田遺跡、一本松遺跡の住居では、中央土坑においても浅土坑～中土坑が主体であり、特に浅土坑のものが多く見られる。一ノ口遺跡Ⅰ地点、四反田遺跡、下稗田遺跡などの住居内にある中央土坑において台石などの石材が土坑底に見られる例がある。中央土坑の位置は住居の中央の位置するものがほとんどであるが、やや偏在して位置するものも見られる。平面方形の住居では中央土坑がないものが多く、存在しても浅土坑のものばかりで地床炉との関係が想定される。中央に位置するものが多い。

双ピットの位置では、無いものや不明瞭なものを除くと中央土坑の外側に配置されるものが多く、中央土坑の周囲に１個のみ見つかる場合でも土坑の外側に見られるものが多い。中央土坑に隣接して掘られる双ピットは決して多くはないが、一定量存在するようであり、２つの内１つだけが隣接するものが多く見られる。双ピットにおいてはあまり遺跡による傾向の違いはみられない。

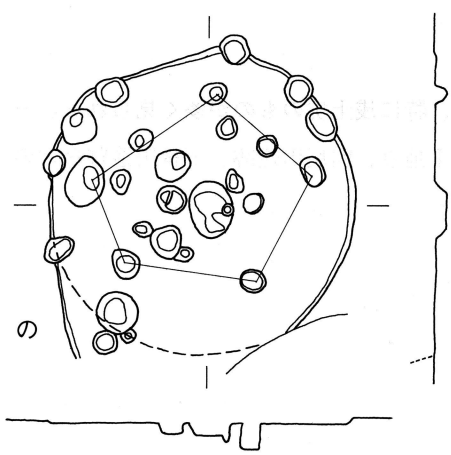
（蔭山）



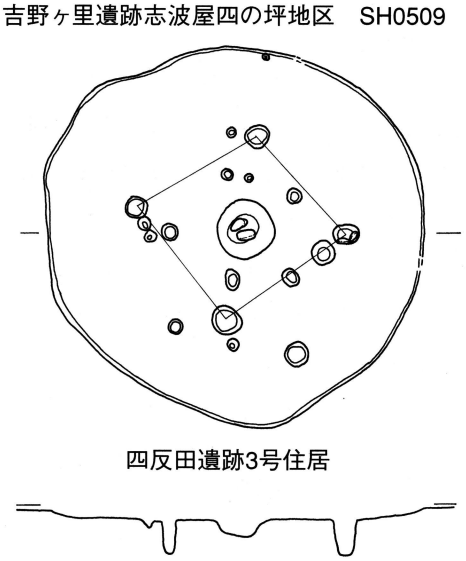
江辻遺跡10号竪穴式住居
(文献　新宅1994よりトレース、約100分の1)



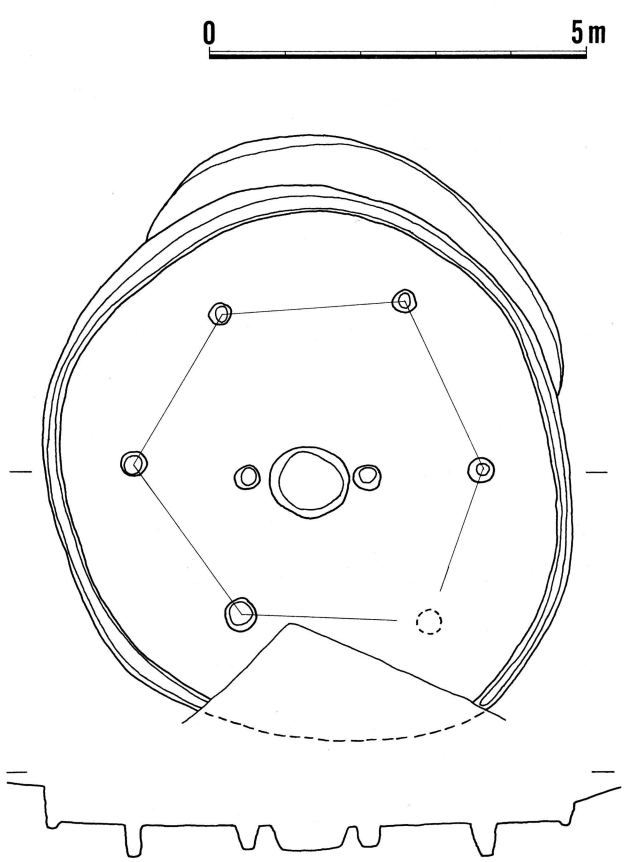
一ノ口遺跡Ⅰ地点J116



吉野ヶ里遺跡志波屋四の坪地区　SH0509



四反田遺跡3号住居



下稗田遺跡C地区19号住居跡

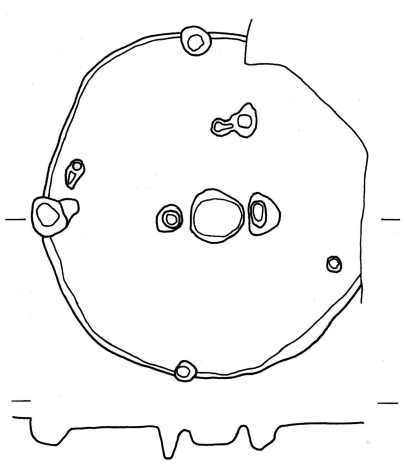
第６図　九州地域の松菊里住居（１：100）

（4） 中国・四国・近畿地域の事例

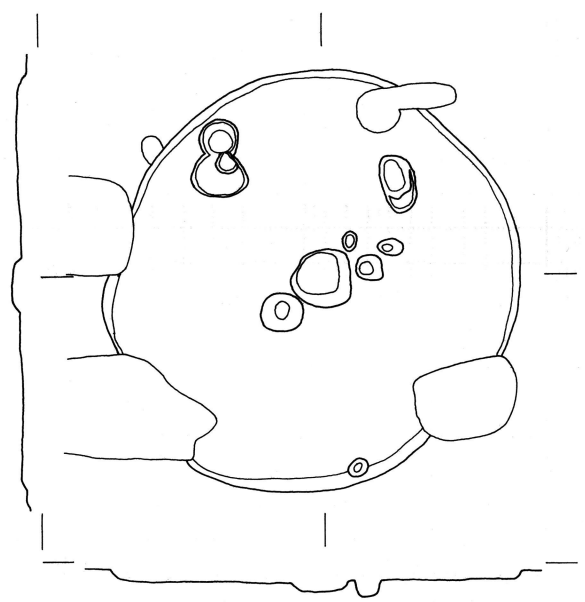
平面形態では、平面円形で主柱配置が多角形配置と無主柱のものがほとんどである。平面方形・隅丸方形・長方形の住居は高知県田村遺跡、大阪府美園遺跡住居でみられ、どちらも無主柱の住居である。美園遺跡では平面方形・長方形の住居ＢＳＩ204・ＢＳＩ205の方が平面円形の住居より古いものとされており、平面方形・長方形のものから平面円形の住居への変遷が見られる。

中央土坑の形態では、長方形・楕円形中土坑の土坑が多いが、方形・円形中土坑のものも一定量存在する。やや異なる傾向を示すのは先述した田村遺跡と大阪府山之内遺跡で、田村遺跡では平面形態にかかわらず中央土坑の浅土坑のものが見られ、山之内遺跡の住居ではそのほとんどにおいて掘り形が残っておらず床面が削平されているもの（表において括弧付けにしたもの）が多いことにより、異なる傾向が見られるものと思われる。中央土坑内に台石などの遺存例はない。平面長方形の住居である美園遺跡ＢＳＩ204では住居中央に平面楕円形で深さ10㎝前後の浅土坑があり、その埋土に炭粒が含まれる観察から炉として機能した可能性が高いものである。

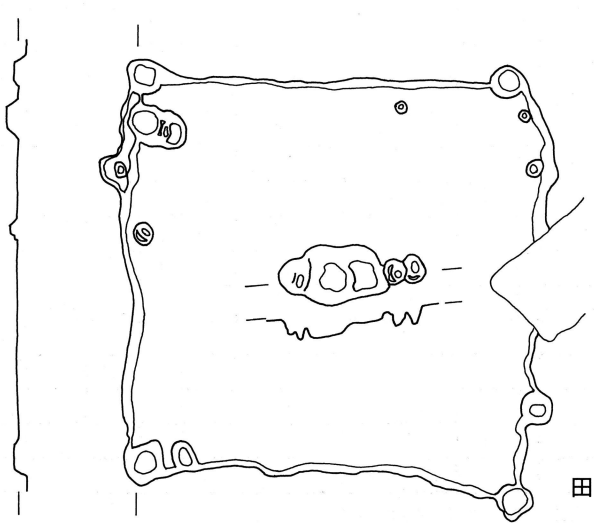
双ピットの位置では、無いものや不明瞭なものを除くと中央土坑の外側に配置されるものが多く、九州地域と同様な傾向にある。　　（蔭山）



文京遺跡SB2



大開遺跡SB402



田村遺跡群 Loc.25ST4

第７図　四国・中国・近畿地域の松菊里住居（１：100）

番号	遺跡名	平面形								柱配置					中央土坑							位置			双ピット			
		円形	楕円形	多角形	胴張方形	隅丸方形	方形	胴張長方形	隅丸長方形	長方形	多角形配置	方形配置	長方形配置	三角形配置	一本配置	無支柱・不明	長方・楕円形浅	長方・楕円形中	長方・楕円形深	方・円形浅	方・円形中	方・円形深	地床炉・他	中央土坑なし	中央	偏在	壁際・主柱穴間	内	外接	外離	双ピットなし
長崎県																														
1	馬込遺跡（前期）	1														1	1								1				1		
2	四反田遺跡（前期）	14	3								2	4				11	6	3		3	5				15				1	14	2
佐賀県																														
3	西石動遺跡（前期末～中期初）	15									10		1			4	5	2	2			6			9				1	1	7
4	下石動遺跡（中期前半）	8									8						1	4	1			1	2		8				4		1
	下石動遺跡（中期前半）					1	1		1							3		1							3				1	1	1
5	大曲Ｂ遺跡（中期前葉）	4									3	1					1	3												4
	大曲Ｂ遺跡（中期前葉）						3									3								2	1						
6	一本谷遺跡（前期末～中期初）	26									13	12				1	6	7	2	2	2			4	21			1	8	12	1
7	雲透遺跡（前期末～中期初）	1									1						1								1						1
8	吉野ヶ里遺跡（前期）	7									1	4				2	1	2		2	1			1	5			1	1	4	1
	吉野ヶ里遺跡（前期末～中期初）	11	1								4	3	2		1	2	2	5（1）		2	2				11			1	3	7	0
	吉野ヶ里遺跡（中期前葉）	1					1				1					1						1		1	1					1	1
福岡県																														
9	下稗田（前期）	3									2		2					1？													
	下稗田（前期末～中期初頭）	41	1								34				3	5		2（7）													
	下稗田（中期前葉）	15	1								10	2				4		2													
	下稗田（中期前葉）				1											1															
10	一ノ口遺跡Ⅰ地点（前期後半）	12									7	5						3													
	一ノ口遺跡Ⅰ地点（前期末～中期初）	26									18	4	2		1	1		4（1）													
	一ノ口遺跡Ⅰ地点（中期前葉）	9	1								9	1						3													
	一ノ口遺跡Ⅰ地点（前期後半）					1	1	4	1			1			1	5															
	一ノ口遺跡Ⅰ地点（前期末～中期初）					1	1	5	4			1			2	8															
	一ノ口遺跡Ⅰ地点（中期前葉）						1	3	1							4															
11	吉武遺跡群１次Ⅱ区（前期）					1			2							3															
	吉武遺跡群１次Ⅱ区（中期前葉）	2									1	1																			
	吉武遺跡群１次Ⅱ区（中期前葉）								1							1															
12	石崎曲り田遺跡（早期）				5							5												5							5
	石崎曲り田遺跡（中期前葉）	1									1																				
13	野黒坂遺跡（前期）	1									1														1						1
	野黒坂遺跡（前期）					1										1									1						1
	野黒坂遺跡（前期末～中期初）	4									3					1		1							4				1		4
	野黒坂遺跡（前期末～中期初）					1		5																5	1						1
14	柳ヶ谷遺跡（前期末～中期初）	1									1								1			1				1				1	
	柳ヶ谷遺跡（中期前葉）	1									1								1										1		
15	三沢逢ヶ浦遺跡（前期）	1									1								2											1	1
	三沢逢ヶ浦遺跡（前期末～中期初）	4									4								4						3					3	
	三沢逢ヶ浦遺跡（中期前葉）	5									5								4					1	4				1	2	
16	合の原遺跡（前期末～中期初）	6			2						4	2					2		4						5	1			1	2	3
	合の原遺跡（前期末～中期初）	1	1									1			1			2				2					2				
17	岩本遺跡２次（中期前葉）										1					1									2				2		
18	徳永川ノ上遺跡（前期末～中期初）	1									（1）					1		（1）						1		（1）					1
19	長田遺跡（縄文晩期～弥生前期）	2									2							（1）						2				1			3
20	上の原遺跡（前期末～中期初）										（6）						（2）	（1）		（1）				（1）	（3）	（1）				（3）	（2）
21	堀町・大碇遺跡（前期）	6					3			2	6（1）					5	1	2（1）	1		4			3	7					1	7（1）
22	東入部遺跡群第７次（前期末～中期初）	3									1	1	1				2			1					3						3
	東入部遺跡群第７次（中期前葉）	5									5						1	4						1	5						4
23	比恵遺跡群（中期前葉）	1									1（2）							1	1					1					2	1	
24	田村遺跡（中期前葉）								1							1（1）									1（1）						1（1）
25	有田遺跡第78次（前期）	1（1）									1（1）						1		（1）					2	2						
26	高槻遺跡第８地点（前期末～中期初）	1									1（1）						（1）								（1）						1
27	道蔵遺跡（前期末～中期初）	（1）														（2）		（1）	（1）											（3）	
28	笹井原遺跡第１次（前期末～中期初）	6									6							（4）			（2）				6				2	1	3

第２表　日本の竪穴住居一覧表（１）

番号	遺跡名	平面形								柱配置					中央土坑							位置			双ピット			
		円形	楕円形	多角形	胴張方形	隅丸方形	方形	胴張長方形	隅丸長方形	長方形	多角形配置	方形配置	長方形配置	三角形配置	二本配置	無支柱・不明	長方・楕円形浅	長方・楕円形中	長方・楕円形深	方・円形浅	方・円形中	方・円形深	地床炉・他	中央土坑なし	中央	偏在	壁際・主柱穴間	内	外接	外離	双ピットなし
大分県																														
29	森山遺跡（前期末～中期初）	1	1								2														1	1				1	1
30	小野遺跡（中期前葉）	3	1								1	1				2	1	1							1	1					4
31	台ノ原遺跡（中期前半）	1										1					1					1		2			1				
熊本県																														
32	熊本県上の原遺跡（前期末～中期初）	5	2					3	1		3	1				7		2				1		10	3					1	7
山口県																														
33	突抜・馬場遺跡（前期末～中期初）	1									1							(1)							1						1
	突抜・馬場遺跡（中期前葉）	8									3					4		(1)			(2)			5	1	1				1	3
34	砂地岡遺跡（前期末～中期初）	3									3								2			1			3						3
35	右田・一丁目遺跡（前期末～中期初）	1													1					1					1						1
36	赤妻遺跡（中期前葉）	1																1							1					1	
広島県																														
37	岡の段Ａ地点遺跡（前期）	3							1		1					3	1			2			1		1				2		2
	岡の段Ｃ地点遺跡（前期）	1														1					1				1					1	
38	青木原遺跡（前期）	(1)									1							1								1					
岡山県																														
39	百間川沢田遺跡（前期）	1(2)									(1)	1(2)					(1)				1(2)				1(3)				1(1)	(1)	(1)
40	南溝手遺跡（前期）	2(1)									1(1)	1				(1)		1		(1)	(1)	1	1(1)		2(1)	1	1(1)			1(2)	1
愛媛県																														
41	文京遺跡４次（前期）	2									1					1					2				2					1	1
香川県																														
42	一の谷遺跡群 平城地区（前期）	2									1	1						1	1						2					1	1
43	下川津遺跡（前期）		1													1								1							1
44	鴨部・川田遺跡（前期末～中期初）	6	1								3					3		1						5		2					7
徳島県																														
45	大柿遺跡（前期）	1														1		(1)							1						
高知県																														
46	田村遺跡群（前期）	6	1								4	1				2	1	1		1	2			2	4	1		1	2	1	3
	田村遺跡群（前期）					1	3									4	1	1		1				1	2	1			1	1	2
兵庫県																														
47	大開遺跡（前期）	1	1		1							1				2		1		1				1	2					1	2
48	玉津田中遺跡（前期）	1										1						1							1						1
49	新方遺跡（中期前葉）	(1)										(1)						(1)							(1)					(1)	
大阪府																														
50	山之内遺跡（前期末～中期初）										(7)						(5)	(1)						(1)	(6)				(1)	(4)	(2)
	山之内遺跡（中期前葉）	5									3(7)	2					1(2)	2(4)	1	(1)	1				5(7)				1(1)	1(3)	3(3)
51	田井中遺跡（前期）	2(1)	(1)								1(1)	1				(1)		1	1					(2)	1	1					2(2)
52	瓜破遺跡（中期前葉）	1									1							(1)							1				(1)		
53	美園遺跡（前期）	4					1			(1)	1		1(1)			3	1(1)				1			3	3				1		4(1)
奈良県																														
54	鴨都波遺跡（前期末～中期初）	1														1					1				1					1	
三重県																														
55	辻垣内遺跡（中期中葉）	1										1						1					1		1					1	
56	蛇亀橋遺跡（縄文晩期）	1	1								1					1															
57	金剛坂遺跡（前期）	1									1							1							1				1		
58	鐘突遺跡（前期）	1														1				1					1						1
59	平田遺跡（中期前葉）	1									1						1								1					1	
60	東庄内Ｂ遺跡（中期中葉）	4										4										3	1	1	3					2	1
61	大谷遺跡（前期）	2									1				1						1	1			2					1	1
愛知県																														
62	朝日遺跡（古墳前期）	26	1								8	2				17	3	5	3					16	11				2	2	5
	朝日遺跡（中期前葉）					9	20	18				4	4			39							2	45							
63	山中遺跡（前期）						6									6					1		2								
64	西志賀遺跡（前期）					1										1															
65	志賀公園遺跡（古墳前期）	2									1	1					1							1	1				1		
	志賀公園遺跡（中期前葉）					3						1				2								3							
長野県																														
66	原田遺跡（中期前半）				1		2									3				3							2				1

第３表　日本の竪穴住居一覧表（２）

4．「松菊里型住居」の特徴とそのあり方

～日韓の比較検討～

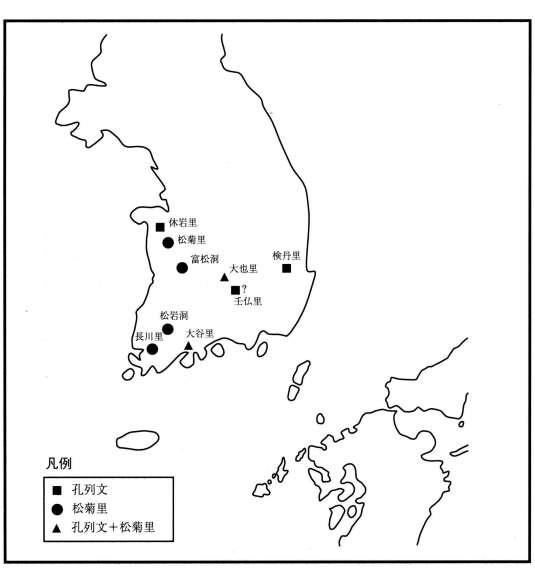
（1）平面形態～韓国における地域性～

ここでは表で細かく分けて観察した要素をある程度単純化してそれを組み合わせいくつかの類型をつくりその分布を観察しながら韓国の松菊里型住居の分布の特徴をみていきたい。ここでは中央土坑があるかないか、平面プランが方形系統か円形系統か、主柱が方形・長方形配置をとるか主柱がないか[2]という3つの項目で8つの類型をつくることにする。中央土坑があるものが松菊里型住居なのでこれがあるものを松菊里、ないものを非松菊里とし、平面プランの方形系統を方系、円形系統を円系、また無主柱のものをA、四角形配置のものをBとして8つの類型をそれぞれ円系松菊里Aタイプ、円系松菊里Bタイプなどとよぶことにする。

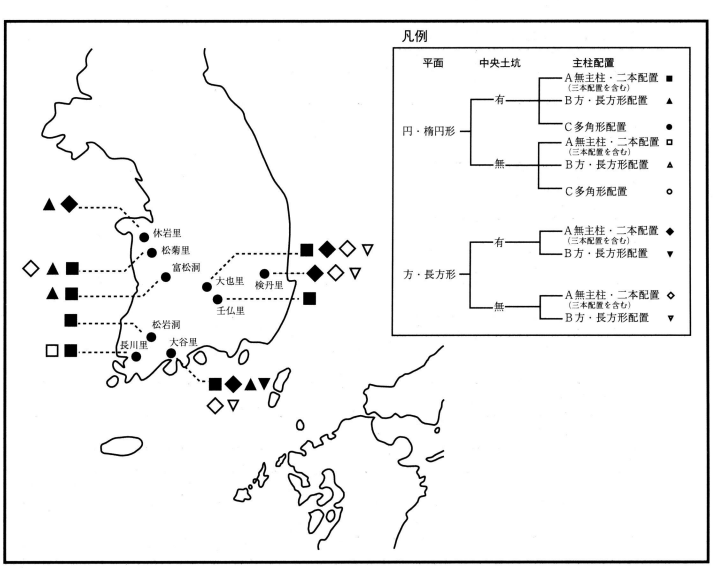
8つの類型の遺跡ごとの分布は図9のようになる。これに図8の松菊里型土器と孔列文土器の分布を重ね合わせると以下のようになる。円系松菊里Aタイプは壬仏里遺跡を除き松菊里型土器が出土する遺跡である。また、方系非松菊里Bタイプは孔列文土器を出土する遺跡にある。これらはそれぞれの土器文化の典型的な住居と考えることができる。方系松菊里Aタイプもすべて孔列文土器を出土する遺跡にあるがその住居形態から松菊里型と孔列文の住居の折衷型とみてもよかろう。方系非松菊里Aタイプは検丹里遺跡を除けば松菊里型土器の分布地域となるが、これを松菊里型土器文化の内の方形住居と考えるか孔列文との折衷型と考えるか今のところ確定できない。方系松菊里Bタイプは大谷里にのみみられる松菊里型と孔列文の住居の折衷型である。円系松菊里Bタイプは地域的な分布がとらえがたい。

以上を概観すると、典型的な松菊里型住居である円系松菊里Aタイプは西海岸を中心に分布しその北と東には孔列文土器文化の方系非松菊里Bタイプが展開し、両文化が接触する地域では様々な折衷型の住居が生まれたと思われる。　（伊藤）

2）韓国では多角形配置の住居はみつかっていない。



第8図　韓国の無文土器時代の遺跡



第9図　韓国の松菊里型住居

（2）平面形態～日本における地域性～

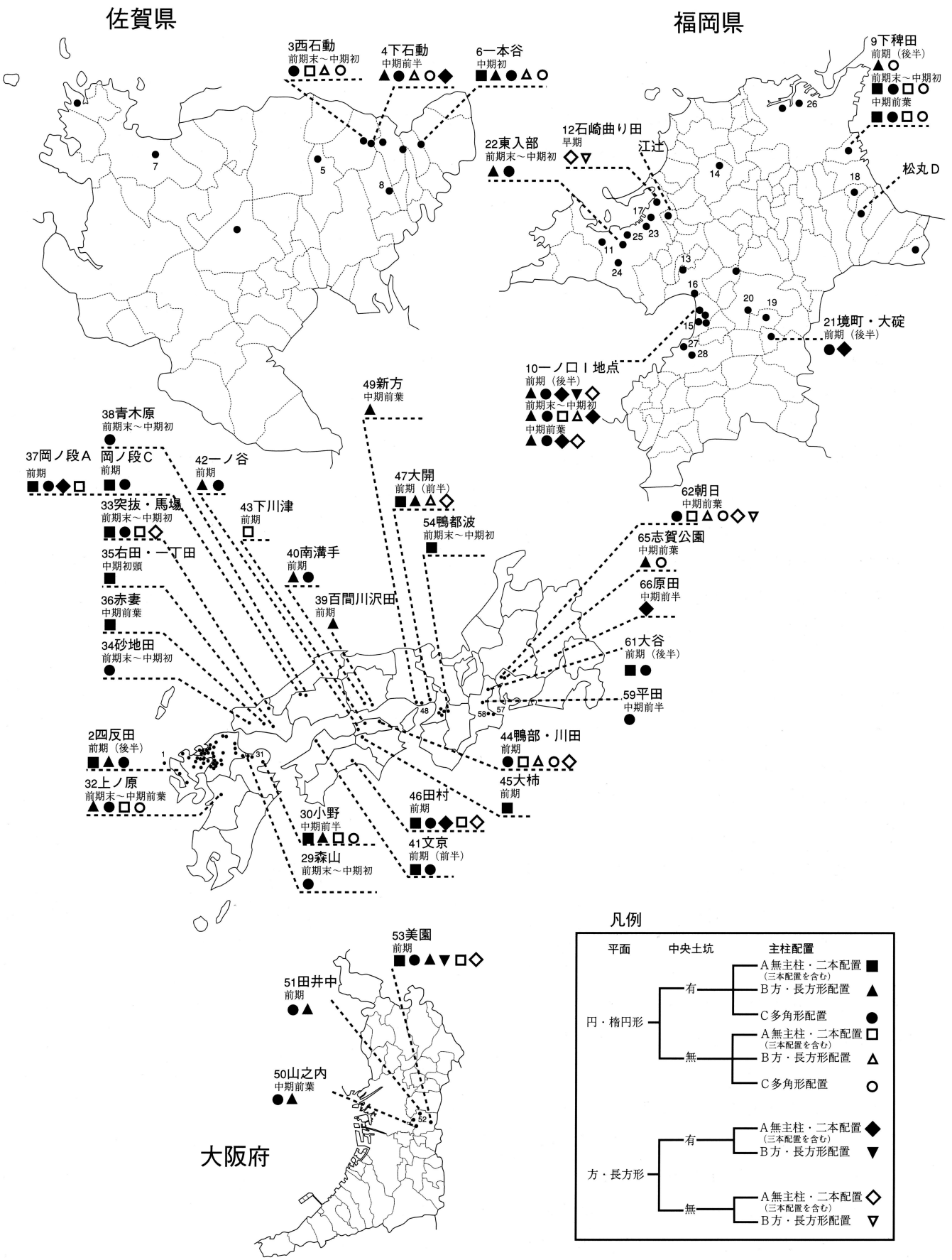
日本においてみられる多角形配置の主柱配置のものをCタイプとして、韓国における8類型に円系松菊里Cタイプ・円系非松菊里Cタイプの2類型を加える。

九州地域においては全ての類型がみられるが、円系松菊里Cタイプが圧倒的に多く、それに円系松菊里Aタイプが続いて多く、円形松菊里Bタイプが優勢なのは弥生時代前期後半の長崎県四反田遺跡で、弥生時代中期初頭の佐賀県一本谷遺跡においても円系松菊里Cタイプと同程度みられる。方系松菊里A・Bタイプは弥生時代中期前半の佐賀県下石動遺跡、福岡県一ノ口遺跡Ⅰ地点、弥生時代前期後半の福岡県大碇遺跡でみられるが各遺跡においても少数しかなく、他には弥生時代前期の高知県田村遺跡群、同広島県岡ノ段A地点遺跡、弥生時代中期前半の長野県原田遺跡においてみられるだけである。弥生時代前期の大阪府美園遺跡同タイプは縄文時代から続く平面方形で灰穴炉を持つ系統のものである。円系非松菊里A・B・Cタイプは、松菊里タイプの変移型と思われ、松菊里タイプの多く見つかっている福岡県にもみられるが、むしろ弥生時代前期末～中期前葉の熊本県上の原遺跡など周辺地域の遺跡においてよくみられるタイプと思われる。方系非松菊里A・Bタイプは弥生時代早期の福岡県石崎曲り田遺跡で典型的にみられるような縄文時代晩期からの伝統的な性格を持つものと一ノ口遺跡Ⅰ地点でみられるような円形松菊里タイプに伴う小型建物的性格をもつものがある。

中国地域・四国地域・近畿地域・東海地域においては、円系松菊里A・B・Cタイプ、方系松菊里A・Bタイプ、円系非松菊里A・B・Cタイプ、方系非松菊里Aタイプがみられ、円系松菊里A・Cタイプが多い傾向にある。円系松菊里タイプと方系松菊里タイプの住居が存在する田村遺跡群のあり方は、現在見つかっている九州地域における住居要素のみでは十分その系譜がたどれないものと思われる。個々の遺跡における検出数が少ないため十分な状況を示せていないかもしれないが、非松菊里タイプの住居のあり方は九州地域と同様なあり方であると思われる。

日本において主体をしめる円系松菊里Cタイプは日本独自の形態と思われ、基本的には福岡県江辻遺跡でみられるような円形系松菊里Aタイプからの住居大型化を伴う地域変容を遂げた類型と考えられる。

このような状況から日本の竪穴住居は平面形態では掘り方平面の部分において、平面円形の要素を韓国の住居から強く受けており、主柱配置では北九州地域の一部の遺跡において韓国に多い方形配置の形態が主体的に見られるほかはあまり日本への影響は少ないものと思われる。　（蔭山）



第10図　日本の松菊里型住居

（3）中央土坑と双ピット～日韓の比較～

松菊里型住居のなかで特徴的な中央土坑と双ピットの関係について、韓国と日本の事例を比較する。一覧表では、中央土坑の深さを3類に示したが、ここでは浅・中土坑をさらに2分割して表記した。

韓国　中央土坑の形態については、検丹里に円形が3例あるのみで、残りすべてが楕円形となる。土坑の深さは、30㎝以下である。特に、20㎝以下に集中する傾向があり、今回の分類の「楕円形浅土坑」が主体を占める。双ピットの位置については、外離・外接タイプが若干存在するものの、圧倒的に内双ピットが主体となる。ただし、大也里と大谷里に外離・外接双ピットが優性となる点は日本との共通要素として指摘できる。

中央土坑と双ピットの相関関係は、「楕円形浅土坑＋内双ピット」と言える。

日本　日本の事例は各地の状況を示すため、地域単位、県単位、あるいは遺跡単位で表した。

長崎県については、楕円形・円形を問わず、30㎝以下の浅・中土坑となる。ただし、楕円形は浅土坑、円形は中土坑が多い傾向を示す。双ピットの位置は外離が主体を占める。

佐賀県については、円形よりも楕円形が主体となる。ただし、前期末から中期初頭の土坑の深さは一定しない。次の中期前葉になると、中から深土坑になる傾向がある。双ピットの位置は、日本では稀な内双ピットが2例みられる。ただし、主体は外離・外接双ピットである。

福岡県下稗田遺跡の場合、中央土坑は円形中土坑が優性となり、双ピットの位置は外離が多い。

福岡県一ノ口遺跡の場合、楕円形深土坑で外離双ピットが優性である。

中・四国については、円形の中土坑が優性。ただし、田村遺跡は浅土坑が優性。近畿については、楕円形中・浅土坑（10～30㎝）で外離双ピットが優性となる。ただし、近畿の事例は削平されていることを加味すれば深土坑の可能性もある。伊勢湾については、近畿地方とほぼ同じ傾向を示す。

以上の分析結果から、以下の傾向が指摘できる。

（1）中央土坑の形態について、韓国は楕円形主体、日本は2つの形態が拮抗する。

（2）中央土坑の深さについて、韓国は浅土坑主体、日本は中・深土坑が主体となる。特に中央土坑の深さは築後地域が最も深く、周辺地域でやや浅くなる傾向がある。

（3）双ピットの位置について、韓国は内双ピットが主体、日本は外離・外接双ピットが主体となる。大也里遺跡と大谷里遺跡の2遺跡のあり方は日本との共通点として注目できる。　（永井）

韓国

遺跡名	土坑形態	中央土坑の深さ(cm)					双ピットの位置		
		～10	～20	～30	～40	40～	内	外接	外離
検丹里	楕円	1							1
	円	2	1					2	1
松菊里	楕円	3	7				10		
大也里	楕円	3	3	2			3		5
松岩洞	楕円		1				1		
休岩里	楕円	1	8				9		
大谷里	楕円	1	6	2			5	3	1
富松里	楕円		2				2		
長川里	楕円		1	3			4		

長崎県

時期	土坑形態	中央土坑の深さ(cm)					双ピットの位置		
		～10	～20	～30	～40	40～	内	外接	外離
前期	楕円	4	2	2				1	7
	円	2	2	4				1	7

第4表　中央土坑と双ピット（1）

佐賀県

時期	土坑形態	中央土坑の深さ(cm)					双ピットの位置		
		～10	～20	～30	～40	40～	内	外接	外離
前期末～中期初	楕円	1	7	5	2	3	2	6	10
	円		2	1	1			2	2
中期前葉	楕円			2	2	1		4	1
	円			1				1	

福岡・下稗田

時期	土坑形態	中央土坑の深さ(cm)					双ピットの位置		
		～10	～20	～30	～40	40～	内	外接	外離
前期	楕円								1
	円								
前期末～中期初	楕円				1	3		3	1
	円		1	3	4			1	7
中期前葉	楕円				1				
	円			1		2		1	2

福岡・一ノ口

時期	土坑形態	中央土坑の深さ(cm)					双ピットの位置		
		～10	～20	～30	～40	40～	内	外接	外離
前期	楕円		1		4	6		3	8
	円			1		1		1	1
前期末～中期初	楕円				3	14		3	13
	円				1	1		2	
中期前葉	楕円			1	4	2		4	3
	円				2	1			3

中・四国

時期	土坑形態	中央土坑の深さ(cm)					双ピットの位置		
		～10	～20	～30	～40	40～	内	外接	外離
前期	楕円		3	2				3	2
	円	1	1	4	2	1	2	1	6
前期末～中期初	楕円			1					1
	円								

近畿

時期	土坑形態	中央土坑の深さ(cm)					双ピットの位置		
		～10	～20	～30	～40	40～	内	外接	外離
前期	楕円		1		1			1	1
	円		1						1
前期末～中期初	楕円	1	3	1	1			1	5
	円				1				1
中期前葉	楕円		2	3				2	3
	円				1				1

伊勢湾

時期	土坑形態	中央土坑の深さ(cm)					双ピットの位置		
		～10	～20	～30	～40	40～	内	外接	外離
前期	楕円								
	円		2					1	1
中期前葉	楕円		3	1		1		2	3
	円								
中期中葉	楕円			1	2				3
	円								

第５表　中央土坑と双ピット（２）

5．今後の展望と課題

以上の検討の結果と今後の課題を以下に述べる。

①住居内部にある中央土坑と双ピットの存在が「松菊里型住居」の要素として重要であり、中央土坑の有無が「松菊里型」・「非松菊里型」の分類に特に有効であること。

②今回分析の対象とした時代・地域においては、韓国西部地域に主に分布する円系松菊里Ａタイプ、韓国東部に分布すると想定される方系非松菊里Ｂタイプ、日本における円系松菊里Ｃタイプの大きく３つの主要な類型があり、現在発見されている資料からはその他の類型はこれらの折衷型・変容型の可能性があること。

③日本における松菊里型住居の伝播時期は縄文時代晩期中頃までさかのぼるものと思われる（受容の第１の画期）が、その受容は福岡県江辻遺跡竪穴住居にみられるように弥生時代早期～弥生時代前期前半の時期に大きな画期が想定され（第２の画期）、弥生時代前期後半には日本独自の円系松菊里Ｃタイプの（第３の画期）、さらに弥生時代中期前葉には尾張・北陸地域への受容（第４の画期）が想定される。

④松菊里型住居の系譜において、平面円形の要素がどこから由来するのか、今後の重要な課題である。

⑤中央土坑の深さについて、韓国の浅土坑、日本の中・深土坑の地域性が想定され、特に筑後地域において最深の土坑が多いことが明らかになった。日本の遺跡との類似性として大也里遺跡・大谷里遺跡における中土坑の存在があげられる。

⑥双ピットの位置についても⑤の中央土坑と同様、韓国・日本のそれぞれの地域性が想定され、日本の遺跡との類似性として大也里遺跡・大谷里遺跡における外接・外離双ピットの存在が挙げられる。

⑦中央土坑の機能について、石器製作などの工程・作業は中央土坑のある松菊里型住居という「場」が大切なのか、松菊里型住居に伴う「中央土坑」が大切なのか今後の究明が待たれる。

⑧双ピットの中央土坑との位置については、外接・外離双ピットへの変化が福岡県江辻遺跡例などを見ると必ずしも住居大型化に伴う変化と考えられないこと。

⑨⑥と関係するが、双ピットの位置の変化が中央土坑の変化と合わせて単純に地域性の表れか、または他にどのような意味を持つのか今後の検討課題である。

⑩松菊里型住居の主要な要素である中央土坑と双ピットは、韓国において外来のものか、在来のものか、韓国における松菊里型住居の時間的変化の解明とともに重要な課題と思われる。

以上10の点について述べたが、住居形態に表れたこれらの変化や画期の意味を考えるのはすべて今後の研究テーマとなる。　（蔭山）

おわりに

本稿は、名古屋市北区に所在する志賀公園遺跡から発見された竪穴住居（SB12）をどのように位置づけるかが発端になっている。志賀公園遺跡の調査を担当した永井・伊藤に加え、弥生時代の竪穴住居を研究している蔭山が加わり、３名による勉強会の成果をまとめたものである。今後、資料の再検討を行い、再度、報告書作成に向けて稿を改めるつもりである。松菊里型住居の東端である愛知県で行った検討のため、西日本、特に九州地域の資料が把握できていない。各方面からの御指摘、御批判いただければ幸いです。

最後に本稿を作成するにあたり、以下の方々の御協力・御援助を得た。記して感謝の意としたい。

浅野真理、石橋茂登、楠本正士、清家章、高木

芳史、細川金也、古門雅高、田崎博之、梅木謙一（敬称略・順不同）

本稿は３名による分担執筆の体裁を採った。文責は各文末に記した。作表・作図は３名による協議の上、永井が取りまとめた。

参考・引用文献

李健茂　1992　「松菊里型住居分類試論」『擇窩許善道先生停年紀念韓国史学論叢』　一潮閣

安在晧　1992　「松菊里類型の検討」『嶺南考古学』11

申鉉東　1993　「朝鮮・日本古代住居址考」『朝鮮原始古代住居址と日本への影響』　雄山閣

安在晧　1995　[Ⅴ．考察　１、無文時時代の遺跡（２）遺物の検討」『蔚山検丹里マウル遺跡』　釜山大学校博物館研究叢書第17輯　釜山大学校博物館

申相孝　1996　「松菊里型住居址の復原的考察」『湖南考古学報』4　湖南考古学会

李弘鐘　1996　『青銅器時代の土器と住居』ソギョムンファ社

下條信行　1975　「九州考古学の諸問題　Ⅲ弥生時代」『九州考古学の諸問題』　東出版

宮本長二郎　1985　「九州地方の弥生時代住居」『王子遺跡』　鹿児島県教育委員会

石野博信　1985　「西日本・弥生中期の二つの住居型」『論集　日本原史』　吉川弘文館（『日本原始・古代住居の研究』　吉川弘文館　1990）

石野博信　1986「縄文から弥生へ」『日本の古代』4　中央公論社

都出比呂志　1989　「竪穴式住居の平面形」『日本農耕社会の成立過程』　岩波書店

中間研志　1987　「松菊里型住居－我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究－」『東アジアの考古と歴史　中　』　同朋舎出版

石川悦雄　1991　「宮崎県における弥生時代竪穴式住居の展開」『宮崎県史研究』第５号

速水信也　1994　「Ⅳ　一ノ口遺跡Ⅰ地点の弥生時代集落　１、住居跡」『一ノ口遺跡Ⅰ地点』　小郡市教育委員会

高橋信武　1998　「縄文晩期の方形竪穴住居跡について」『列島の考古学』　渡辺誠先生還暦記念論集刊行会

西谷正　1998　「松菊里型住居の分布とその意味」『先史日本の住居とその周辺』　同成社

都出比呂志　1998　「いわゆる松菊里型住居と弥生住居」『先史日本の住居とその周辺』　同成社

新宅信久　1994　「渡来系稲作集落「江辻遺跡」で発見された大型建物について」『月刊考古学ジャーナル』379　ニュー・サイエンス社

報告書（韓国）

休岩里　国立中央博物館編　『休岩里』　国立博物館古蹟調査報告第22冊　国立中央博物館　1990

松菊里　国立中央博物館編　『松菊里（Ⅰ）』　国立博物館古蹟調査報告第22冊　国立中央博物館　1979

富松洞　ｲ･ｼﾝﾋｮﾝ　「裡里富松洞住居址調査」『湖南考古学報』1　湖南考古学会　1994

大也里　林孝澤・郭東哲・趙顕福　『大也里住居址（Ⅱ）』　東義大学校博物館学術叢書２　1988

林孝澤・郭東哲・趙顕福『大也里住居址（Ⅲ）』　東義大学校博物館学術叢書３　1989

壬仏里　安春培　「居昌壬仏里住居址調査概報」『嶺南考古学』6　1989

松岩洞　崔夢龍　「光州松岩洞住居址発掘調査報告」『韓国考古学報』4　1978

長川里　崔盛洛　『霊岩長川里住居址址（Ⅰ）』　木浦大学博物館学術叢書第４冊　1986

崔盛洛　『霊岩長川里住居址址（Ⅱ）』　木浦大学博物館学術叢書第６冊　1986

大谷里　崔夢龍・権五栄・金承玉　「大谷里道弄住居址」『住岩ダム水没地区文化遺跡発掘調査報告書（Ⅵ）』　全南大学校博物館・全羅南道　1989

徐聲勲・成洛俊　「大谷里道弄・漢室住居址」『住岩ダム水没地区文化遺跡発掘調査報告書（Ⅵ）』　全南大学校博物館・全羅南道　1989

李命憙・成洛俊・孫明助　「大谷里漢室住居址」『住岩ダム水没地区文化遺跡発掘調査報告書（Ⅶ）』　全南大学校博物館・全羅南道　1990

崔夢龍・李根旭・金庚澤　「大谷里道弄住居址」『住岩ダム水没地区文化遺跡発掘調査報告書（Ⅶ）』　全南大学校博物館・全羅南道　1990

検丹里　釜山大学校博物館編　『蔚山検丹里マウル遺跡』釜山大学校博物館研究叢書第17輯　釜山大学校博物館　1995

報告書（日本）

馬込　平戸市史編纂委員会編　『平戸市史　自然・考古編』　平戸市　1995

四反田　久村貞男編　『四反田遺跡発掘調査報告書』佐世保市教育委員会1994

西石動　立石泰久編　『西石動遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第97集　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（12）　佐賀県教育委員会　1990

下石動　高瀬哲郎編　『下石動遺跡』　佐賀県文化財調査報告書第86集　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（６）　佐賀県育委員会　1987

大曲Ｂ　久保伸洋編　『大曲遺跡群Ⅰ』　東脊振村文化財調査報告書第８集　東脊村教育委員会　1984

久保伸洋編　『大曲遺跡群Ⅱ』　東脊振村文化財調査報告書第９集　東脊村教育委会　1985

一本谷　七田忠昭編　『一本谷遺跡』　上峰村教育委員会　1983

雲透　唐津市教育委員会編　『雲透遺跡（Ⅱ）』　唐津市文化財調査報告書第83集　唐津市教育委員会　1998
吉野ヶ里　七田忠昭ほか　『吉野ヶ里遺跡』　佐賀県教育委員会　1994
下稗田　長嶺正秀・末永弥義　『下稗田遺跡』　行橋市文化財調査報告書第17集　下稗田遺跡調査指導員会　1985
一ノ口　連水信也・柏原孝俊編　『一ノ口遺跡Ⅰ地点』　小郡市文化財調査報告書第86集　小郡市教育委員会　1994
吉武遺跡群　横山邦継編　『吉武遺跡群』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集　福岡教育委員会　1995
石崎曲り田　橋口達也編　『石崎曲り田遺跡Ⅰ』　今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第８集　福岡県教育委員会　1983
野黒坂　松岡史編　「野黒坂遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第１集　福岡県教育委員会　1970
柳ヶ谷　児玉真一編　『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』第３集　福岡市教育委員会　1980
三沢蓬ヶ浦　宮小路賀宏編　『三沢蓬ヶ浦遺跡』　福岡県文化財調査報告書第６集　福岡県教育委員会　1984
合の原　佐々木隆彦編　『合の原遺跡』　一般国道３号線筑紫野バイパス 係埋蔵文化 財調査報告 第１集　福岡県教育委員会　1986
岩本遺跡群　濱石哲也編　『入部Ⅳ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第343　1993
徳永川ノ上　柳田康雄・緒方泉　『徳永川ノ上遺跡Ⅰ』　一般国道1０号線横断道路関係埋蔵文化財調査報告第４集　福岡県教育委員会
長田　井上裕弘編　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-30-』　福岡県教育委員会　1994
上の原　小田和利　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-33-』　福岡県教育委員会　1995
堺町・大碇　水ノ江和同他　「堺町・大碇遺跡」『一般国道浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第８集』　福岡県教育委員会　1994
入部　榎本義嗣・濱石哲也・池田祐司　『入部Ⅷ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第577　福岡市教育委員会　1998
比恵遺跡群　大庭康時　『比恵遺跡群26』　福岡市教育委員会　1998
田村　瀧本正志他　『田村遺跡12』　福岡市教育委員会　1997
有田・小田部　井澤洋一　「有田・小田部第29集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第538集　福岡市教育委員会　1997
高槻　宇野慎敏『高槻遺跡第８地点』（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化調査室　1996
道蔵　神保公久・近澤康治・小澤太郎　『久留米市内遺跡群』　久留米市教育委員会　1997
笹井原　小澤太郎編　『上津・藤光遺跡群』　久留米市教育委員会1997
森山　原田昭一他　『森山遺跡』　中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（６）　大分県教育委員会　1995
小野　松本啓子　『小野・大魔遺跡』　安岐町文化財調査報告書第３集　大分県安岐町教育委員会　1994
台ノ原　後藤宗俊・清水宗昭・真野和夫　『台ノ原遺跡』大分県文化財調査報告第33輯　大分県教育委員会　1975
上の原　松本健郎・野田祐治　『上の原遺跡Ⅰ』　熊本県文化財調査報告第58集　熊本県教育委員会　1983
突抜　原耕一郎・中城龍宏・渡辺一雄　『よみがえる弥生のムラ－突抜・馬場遺跡－』　山口県埋蔵化財調査告第87集　山口県教育委員会　1985
馬場　原耕一郎・中城龍宏・渡辺一雄　『よみがえる弥生のムラ－突抜・馬場遺跡－』　山口県埋蔵化財調査告第87集　山口県教育委員会　1985
砂地岡　楢崎悦夫・渡辺一雄編　『砂地岡遺跡』　山口県埋蔵文化財調査報告第60集　財団法人山口県教育財団山口県教育委員会　1993
右田・一丁目　山口県教育委員会文化課編　『右田・一丁目遺跡、的場・宮の鳥遺跡、久米市遺跡』　山口県埋蔵文化財調査報告第19集　山口県教育委員会　1973
赤妻　鈴木卓編　『赤妻遺跡Ⅱ』　山口県埋蔵文化財調査報告第154集　山口県教育委員会　1993
岡の段Ｃ地点　梅本健治・辻満久編　『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告（Ⅳ）（本文編）』　広島県埋蔵文化財センター調査報告書第132集　財団法人　広島県埋蔵文化財センター　1994
岡の段Ｃ地点　梅本健治・辻満久　『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅳ）』（本文編）広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第132　（財）広島県埋蔵文化財調査センター　1994
青木原　鍛冶益生編　『青木原遺跡発掘調査報告書』　広島県埋蔵文化財センター調査報告書第50集　財団法人広島県埋蔵文化財センター　1986
百間川沢田　平井勝編　『百間川沢田遺跡３』　岡山県埋蔵文化財調査報告84　建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会　1993
南溝手　平井勝編　『南溝手遺跡１』　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100　岡山県教育委員会　1995
文京４次　梅木謙一ほか編　「文京遺跡４次調査」　『道後城北遺跡群』松山市文化財調査報告書30　（財）松山市生涯学習振興財団　1992
一の谷遺跡群　西岡達哉編　『一の谷遺跡群』本文編　四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第７冊　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1990
下川津　藤好史郎・西村尋文編　『下川津遺跡－第１分冊－』　瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団　1990

鴨部・川田　森格也　『鴨部・川田遺跡Ⅰ』第Ⅰ分冊　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局　1997
大柿　徳島県教育委員会他　『大柿遺跡発掘調査概報』　徳島県教育委員会・三好町教育委員会ほか　1976
田村遺跡群　高知県教育委員会編　『田村遺跡群』第１分冊　高知県教委　1986
大開　内藤俊哉・千種浩・前田佳久　『大開遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会・（財）神戸市スポーツ教育公社　1993
玉津田中　山本三郎編　『玉津田中遺跡調査概報Ⅰ－昭和57・58年度確認調査概報－』　兵庫県教育委員会　1984
新方　丸山潔　『新方遺跡発掘調査概要・居住遺跡発掘調査概要』　神戸市教育委員会　1984
山之内　清水和明　『山之内遺跡発掘調査報告』　（財）大阪市文化財協会　1998
田井中　亀島重則　『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅶ』　大阪府教育委員会　1998
瓜破　久保和士・宮本康治　「瓜破遺跡の弥生時代集落跡」『葦火』67号　（財）大阪市文化財協会　1997
美園　渡辺昌宏編　『美園－本文編－』　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター　1985
鴨都波　豊岡卓之　「鴨都波遺跡第７次発掘調査概要」『奈良県遺跡調査概報（1988年度）』　奈良県立橿原考古学研究所　1989
新方　丸山潔　『新方遺跡発掘調査概要・居住遺跡発掘調査概要』　神戸市教育委員会　1984
蛇亀橋　新田洋　「一志郡嬉野町蛇亀橋遺跡」『昭和５６年県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1981
金剛坂　三重県教育委員会　「金剛坂遺跡発掘調査概要」現地説明会資料　三重県教育委員会　1998
鐘突　松阪市教育委員会編　『松阪市中石町鐘突遺跡発掘調査報告書』　松阪市教育委員会　1981
平田　安濃町遺跡調査会編　『平田古墳群』　1987
東庄内Ｂ　三重県教育委員会編「東庄内Ｂ」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』　三重県教育委員会　1970
大谷Ｃ地区　小玉道明他　『大谷遺跡発掘調査報告』　Ⅱ・Ⅲ　四日市市教育委員会　1976・1977
大谷Ｂ地区　小玉道明他　『大谷遺跡発掘調査報告』　Ⅱ・Ⅲ　四日市市教育委員会　1976・1977
朝日　加藤安信編　『朝日遺跡』　1982
　石黒立人編　『朝日遺跡Ⅰ』　愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集　1991
山中　服部信博編　『山中遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集　1992
西志賀　杉原荘介・岡本勇　「西志賀貝塚」『日本農耕文化の生成』　日本考古学協会　1961
志賀公園　永井宏幸他　「志賀公園遺跡」『年報平成９年度』　（財）愛知圏埋蔵文化財センター　1998
原田　長野県史編纂委員会編　『長野県史』　考古資料編全１巻（３）主要遺跡（中信・南信）　1983

脱稿後、未見であった福岡県小郡市三沢京江ケ浦遺跡・横隈井の浦遺跡・横隈鍋倉遺跡・津古土取遺跡・三沢栗原遺跡Ⅲ・Ⅳ・北松尾口遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地点の資料を補足した。

その中で、弥生時代前期前半を中心とする時期の竪穴住居がみつかっている津古土取遺跡では、方・長方形配置である円系松菊里Ｂタイプと多角形配置である円系松菊里Ｃタイプの住居がほぼ同数みつかっている。中央土坑の深さをみると、前者は方・円形中土坑が、後者は長方・楕円形深土坑が主体で、円系松菊里ＢからＣタイプへの変遷を考える上で良好な遺跡と思われる。

補足文献（報告書）

三沢京江ケ浦　宮田浩之他　『三沢京江ケ浦遺跡』　小郡市教育委員会　1989
横隈井の浦　片岡宏二編　『横隈井の浦遺跡』　小郡市教育委員会　1989
横隈鍋倉　中島・荒牧宏行編　『横隈鍋倉遺跡』　小郡市教育委員会　1985
津古土取　片岡宏二他　『津古土取遺跡』第１分冊　小郡市教育委員会　1990
三沢栗原Ⅲ・Ⅳ　片岡宏二他　『三沢栗原遺跡Ⅲ・Ⅳ』　小郡市教育委員会　1985
北松尾口Ⅱ地点　速水信也・柏原孝俊　『北松尾口遺跡Ⅱ地点』　小郡市教育委員会　1990
北松尾口Ⅲ・Ⅳ地点　柏原孝俊他　『北松尾口遺跡Ⅲ・Ⅳ地点』　小郡市教育委員会　1992